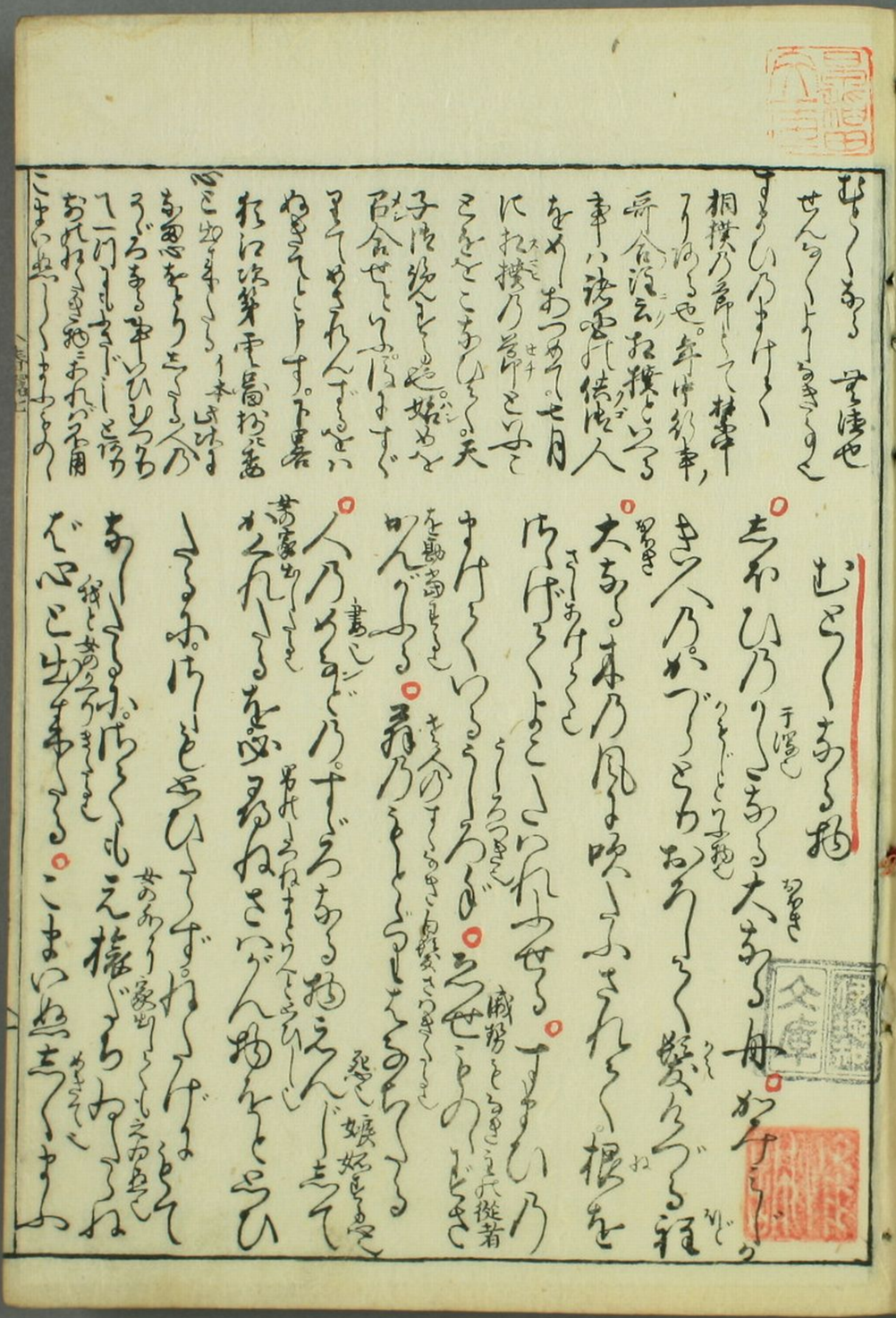
二七九
伊地知文庫
文庫20
394
3

文庫
79
3

赤松氏



和名四曲調類高麗楽曲乃中に。狛犬とてあり。ぱまひを舞よし[illegible]ま舞ふく躍るがまゝなし[illegible]ゆや。伶人よりなし

修法も佛眼真言　是ハ例乃かく出する事ずるひなしぞ。佛眼とハ曼陀羅圖乃中央にあり。一切諸の佛菩薩を囲繞せられ。諸乃佛菩薩乃功徳を具足せり。亦佛母尊とも号せり　瑜祇経云時金剛薩埵對一切如来前忽然現作一切佛母身住大白蓮身作白月暉両目微笑二手住臍如入奢摩地従一切支分出生十恒河沙倶胝佛一々佛皆作礼敬　下略　此修法乃次第ハ真言家秘密也。

[illegible]

物のおもしろがりもやあるべくおぼゆるおし

△修法は仏眼真言などよみたてまつりたる、なまめかしうたふとし

はしたなきもの　こと人をよぶに我ぞとてさし出たるも。物などとらする折はいとど。おのづから人のうへなどうちいひそしりたるに、をさなき子どもの聞とりて、その人のあるにいひ出たる。

八幡の行幸　一条院　永延元年より二月八[illegible]

あはれなる事など人のいひ出、うちなきなどするに、げにいとあはれなりなどききながら、涙のつといでこぬ、いとはしたなし。なきがほつくり、けしきことになせど、いとかひなし。めでたき事を見きくには、まづただいできにぞいでくる。八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院の御さじきのあなたに御こしとどめて、御せうそこ申させ給ふ。世にしらずいみじきに、まことにこぼるばかり

ミなかはれ 洗れ祝れ
女院とも申す 自称
かはらず
せんじの御使 帝より
女院への御使に 宣旨
御使なるべし
随身四人 宰相中将の
召させらるべし

すべてことども此例にて
女院の御桟敷よりおりて
より御使にて下さるるもの
の御つかさ
院の別当 女院の大
別当と 職原抄追加云
院庁
大別当 大臣公卿 清華
之人任之

こそあれなどけさうするつはものども
されば いまぞみるしるらん せんじの
御使まゐるでの 宰相中将の御さじ
きにまゐりければ いとおかしうみえし
つ。只 随身四人 いとらうらうじきすがたなる
みなみの御かたに立てさぶらふぞ いとおかしく
二条の御かたち ひろうきよらかにめでたき
きこえけるを うちみやりて こころにくきさま
いかですこしさぶらはんと おもふて
のみたまひて 院の別
當が中将にしたがひ
ありけるも

女院も大署院と同じ
女院の御桟敷の
おんまへ 帝の御桟敷
ちかくぞ

こゝろにかけしのひやかに
ろかなりや ちかきうちにまゐりて
見まほしきかな 女院の御心にひとり
まゐりけるに さぶらひぬべく
しづかにかなしきにてまゐる
まゐりのしよりきこえたまひ
ぶじ世にふかくおもほしめすに
おもひまゐらするも
関白どのゝ御かた よりさせまして
女房のうちに 中宮
御つぼねのおとゞ
おこなひとわけて

此時は宿直上の御局の黒戸は開きたるとぞ
御ざいましたや
權大納言　勘物云伊周
正暦三年　權大納言
これちかのきみとかく
枇杷莒葉云　謂　桗
訳設乃尻也昔へつけさ
れをいふとも射ひをるを
まちて帰えるでおる
足也沓一とてつわるす
あしげは代々乃制不
同也但近代摂家の関
まうるハ納言はかりさ
公父大臣一大関白の時
一大二大ハうらし大臣
くせをしてでいまいひ
藤つぼのこと
和名云飛香舎在弘徽
殿北布布豆保

させ給へば戸口ちかき人々いろいろの袖ぐち
してみすをひきあげたるに權大納
言殿御沓とりてはかせたてまつり給ふ。
いとものものしくきよげによそほしげに下
がさねのしりながくひき所せくさぶら
ひ給ふ。あなめでた大納言ばかりに
くつとらせたてまつり給ふよと見ゆ。山の井
の大納言その御次々のさならぬ人々くろ
きものをひきちらしたるやうに藤
つぼのへいのもとより登花殿のまへまで
ゐなみたるにほそやかになまめかしうて

宮の大夫殿　勘物云御
堂正暦二年　權大納言。
中宮大夫　如元
紫式部日記云　六月一
日　正暦元年
定子　大夫にハ右衛門督
道長御きやうだいなり中関白
の弟法性寺の関白
の弟　法性寺の関白
忌日
斎日　月ごとに六
斎日にハ殺生を断
事給ふ也
御こころざしなる事を延
ぶこころ

御はかしなどひきつくろはせ給ひやすらはせ給ふに宮の
大夫殿の戸のまへに立たせ給へれば
ゐさせ給ふまじきなめりと思ふほどに
すこしあゆみ出させ給へばふとゐさせ
給へりしこそなほいかばかりの昔の
御おこなひのほどにかと見奉りしこそ
いみじかりしか。中納言の君の忌日
とてくすしがりおこなひ給ひしを
給へその数珠しばしおこなひしてめでたき身
にならんとかるとてあつまりてわらへど
なほいとこそめでたけれ。御前にきこし
めして仏になりたらんこそ是より

[illegible]

はきこめくうちえまぜあつてう
[illegible]
又めぐりくるまつりつかまつる。
太夫どのゝ[illegible]
こゆれど例のごとくせのぶ
てゝのちれたるあるさまこんりせのこと
しのぶことわりこゝろ[illegible]
△九月てうの長[illegible]
のけさはやけくあさ月れやる
けうくもせんざいの菊[illegible]
ぶりぬれてうくもいとゝずい
いらんすきるでのうへよりひる
くものすれこゝのうくるゝ

[illegible]
むをはくぬきてるやうちることい
ぎふあるたうれずこ日みれ
ぬれば萩ちのいとゝもげちてうよ
のおつるうち枝のうちうこきて人も
もれぬるあはあげ面へあげわしる
いこゝういとゝいひること人のこて
られこ
ちりはは[illegible]
うれ△七月わをを人の六月う
もてはをきとうちゝるどする
のもちぬをとゝもとてきる
をはのとこれをバとゝいどこゝ

[illegible]
いとゝけうつふ
イ本ふのをうしぬ
をふをぐつぬとを
けうつる夜のうち
うとつぬく
のつぬの風
はをちうくあはを

[illegible]
はのをれをぬぐ
はのをれをぬぐ

[illegible]
やてこゝをぬを

いざうとこれれ
引繹也ぞ
人ことちうい作と
出人成ゆ　後先
きう出ぐわうるハむし
耳垂耳れぐ
はめど牧弁　ぜ
芽を摘おへをつとど
ちうと巳をえくちつを
をきの出ぶにこうぬ
ハはれうおきちる
中小ハちとう芽もちる
よをとし蔓を壓し

二月そんのはさとの列見
ぐやう　そ二月　列見
のうのあ　ぐし
定考始ハの云事ハれ
ゆくいつるやい江家
釋奠の下を當列見
定考日上簡上卿参釋
奠例天暦二八十一云

いそどいぎあどこれれあわせて
おなとうんいといふものあれば
あわるわきうぬうかあるハちど絶ゆ
又おうはげあるの乃せうとれきれ
はめどあをみおなこうつれふれ
助字
あれぐ蔓もまどわる
まハ寄の心もそれにそも耳垂の心
というの面われどぬいうぐくもあるど
是ハ別除
二月そんのはさとの　定考
とするハ　釋奠　孔子
あうんうのはうすはんんちやくでんもいう
孔廟
聰明也釋奠乃能
一説と云文
べーうう　めいとてうへいもうやにもあや
ちきこよの　あどやうみけよりてまつ

そんのはさと実改官乃後人を
乃改を減敗ちる事ぞ　百寮訓要云大改官とハ太宰帥家
実改官乃被変　官乃庭
列見とハ云事根源云々矢ヤ納言ハ記史ちどトす儀式ハ皆大改官乃内の事
云事しぞ伝ハ下乃義絶ハ　ぬを撰ひ
上ハ　ぬを撰ひ　武ア兵ア乃二省ハ
座うはきく　武ア　定考とハ云事根源云ハ昔六位以下乃ハ階ちる人ハ被蔑絶ハ
を撰ひ　友爵をあいくるとぞ上ハ　官乃東乃廊の座ハ　幸と云ハ
次ハ新所うつまくこ　秋乃武ア　次ハ妻穏乃座ハ　各三献あり
大ちこ二月乃列見ちうぞ　武ア兵乃二省ハ諸司乃上ハ上月と選成
ぬ事と列見とうぞれを出あつ　諸司乃上月と選成
出く　定作ると定考とハ作ると　階考とハ人と撰ひ
ことハ作ると口作ハ作ると也選叙令ハ考ハのせちぞ　定考と文ハ出ハ作れもかぐ
うぐぐけちて　釋奠ハ孔子
乃作乃日れぐうう二月乃中乃丁乃日れぐうう二月乃中乃丁乃日ハ釋奠ハ二月上
ぞハ二ちひ二月と八月とにあり　上乃丁乃日必ちとあり　文学寮ハ孔子乃
十哲乃絵をうくる　上ハ矢ヤ納言ハ　文章博士ハ孔を出ぞ　妻穏乃坐ハ
文章博士ハ孔を出ぞ　礼記　毛詩　尚書　論語　周易　左傳　年　ぬ

明月釋奠乃酢をまいらせ給ふ。義人拝し給ふ。餐乃間はせ給ふの羹子まいらせ給ふ。義人羹をめしやりつるものまれる昨日乃釋奠乃酢をまいらせ給ふ。義人拝して纂中小入中下畧

禮記王制云。釋菜奠幣礼先師。月令仲春特釋奠之。行延喜式江次第等

仁平三年八月台記云。先聖先師九哲像巨勢金岡所寄云云

聰明これの云事根源よりの日釋奠の酢

うゐめいとゝ〳〵うゐめいとゝ〳〵

をまいらせ給ふ。江次第五釋奠乃次第云。寮官居聰明以折數高坏当

寿公丸詰聰明者酢也。餅 白黒粱飯 栗黄 乾棗也。酢字彙云音祚祭福肉也

あやまさ物すでかゝ〳〵けり

餅乃中に

餅餤 裏餅乃中に

絡略ちゞの子雑菜等

をいれ黄合せて四方に

きりゐる物。餅名餅脣

らもふとゝのゐのもの

二月乃列見も八月

定芹も上つ巳下の公

つ諸臣等に三献或と

或ゝらすまる物なり

江次第列見乃日に四献

餅餤を定芹も廳事

朝所宴座穏座等皆

用列見儀と江次第八

けりとゝのやうに

花文綾花文紗乃さ

ゞめのやうにまるうく

りたる。紗乃感つの三枚

の一人也

みすまれたりゆき

任郷儀行 紗感つの

俗りみるべし

これなり 平惟仲 権

中納言時武息 尤中

矢中宮大夫大宰権帥

中納言従二位 公つ補任

紗感つの

へいぶんこつゝを

餅餤 裏餅乃中に

絡略ちゞの子雑菜等

をいれ黄合せて四方に

きりゐる物。餅名餅脣

らもふとゝのゐのもの

二月乃列見も八月

定芹も上つ巳下の公

つ諸臣等に三献或と

或ゝらすまる物なり

へいぶんこつゝは

納言殿乃ゝ月日かきて

ゆきとゝ

いつんとするをひるはかりちわりとゝ

らぬをとゝぐゝおりけるきのひら

おりまりて侍らんせさすれば

ゝをわれるゝ。おりうきりうぐ

かめさせのひゝ侍ふゝとゝせるひつ

人乃ゝ侍ふぐや。とゝすんぱ知る

ゝぐゝ。物すぐやとゝすんぱへいぶんゝて

ゝぐゝ。物すぐやとゝすんぱへいぶんゝて

ゝぐゝ。物すぐやとゝすんぱへいぶんゝて

ゝぐゝ。物すぐやとゝすんぱへいぶんゝて

此安か納言ハもとのこゝよふ
行成ハ我ゆゑるとま
きゝ〳〵隠して向様を
別見定者不安や納
言ハ〳〵小野篁餅腹
皆をするゆゑにこれを
安か納言とすことを
上皮のうちやく
きやう皮ハ大政皮乃
小記史ちらとそうて
ほへてんいらし大政
皮の皮人ちとよわる
まへてすりくし
ミうくそれよりてこ近下
アハいけれいそう
おだ行成乃此篁ハそ
うつ鎌んとするやとく
諸を清て自身持来

ますますまづゞくに出てく大安まよの（惟仲の友をとらへて）
きこえんとけつひたくいえすれバの（清か納言を我ゆ）
いとよくうるえうてきうわぱいくず（惟仲友まの）
わさくし事やぱし此安か納言なとの（しかえ行て）
ゑとまりる揚てきてる下言ど（餅腹し）
そりぱするすやおととへぱけるそ事（惟仲の注し）
も待ちずぱとぶめてくひ待るぱちり
とえせまふぱとし上皮乃うちみくえさ
せまくるとしへぱいうぐいとつふぱぶ只まを
いうどうはうきこうもやうま
とそてますてこね下部ぱにとれいそう
あわとちんえゆるきてめでうさお

ぬ下部ハ桃をざく
行成のこうかいせ女と
かいはされいそう八戻
道すや名程す宵さ
ことをしてし
下部さつふ　被ほが
乃こうくもてこ女下部
はとつてるかげて行成
の下部待ふとのすで
さやうの物うく　赤き落
植よ出て石梅よ付さ
私物いのよろてもかね
せらと云ひしにそし
のりこ川　おかた悪
射則まさて清か奇
よくろハ又よ見待し
ことておかきいてるそ
あリやとし　誰とも云
そしも多を嫌てるへるや
笑ひてやうかんすと
清か不変読起てけて
則ちもしも恥笑て止

まはくくなするをするみつちいわし出て（行成のはかへて）（清か参し）（行成消）
下部けふぬとのくるんぱ出てまっそや（行成のこうかの字程し）
う乃物す奇よみちくおこをせそてとお（志きちの風情のこのもれもし）
そいつるまぴ志てもいひふ。（奇ハよひしをわかすて）
女すし我えしといひさる八言よとゆし（世上の我をわらわる女ハとし）
くずあるけしねこる流らひよそれぱするあと
ういけるすいそん人ぱえりくむ志だんあん
うめてのまふぱりこ川あわやもてそずし笑ひ
てやうかし事を殺乃まへよへいとお
おうくるよ流るとやあひそれだぱとよ
くいひさるとちんのおとせしと人の流
しぱ光ころ見ぐさき我かめども感りし

みかどにおほ城まゐさいてて此納言とひかる君しと関白殿のおほん物のおほん孫なりとし

これこそ人べてすき

あそびつき

見よわ儀のごときさ女房

あぢの中のひきろひしさぞ

わざとひらめり。

六位上やくなり

新蔵人の事を此箋に

乃板をせうつきぎなの

世乃流れなつかしやつゝきき

えしもめでたき伝来の

御かたへいでし六位ハ蔵人

なりとし

かくらうかげもいふべつてし

袰衣抄云ろうちあか貴

女乃着る袍也一斟幼き

上臈乃上にきる袍也。

ちら形細く垂うるれハふつ

みさもつゝきべしとし

かさみハたゞるものとし

花鳥餘情云かざみハ童女乃

きる袍也四宮物汗衫袙の

流毛とか袍のうべし

人のむすめのひしるすと此等は人のうち車の又若き自讀とも

△あじくはくさしえそうじめる六位こそや

くらうど、まきれ流げしし乃うへのみ乃すそ

乃はおもちの板をせうぢつけよ南奈と（中実欄）

をせよろし。又六位をもせんもれぐるまぞふ（六位のくらうどにて）

車をひきうゝあちぎきちあき車ども（近衛とらきうする）

をきむあづまするあるあれどもをとみ

ろんいとおもしき無乃名はわすれあらぬを（何ごととなりし）

いさもろひはべし。あはかざみハ去りるが（わきぎぬの短きとなんとて）

とえりし。おのわらハ乃きるものまうまぽず

めしきぬハうじきさこきぬところをつゝ見ん。（わきぎぬとはなり）

はれどろまゝハくろうし乃人のきるもの

わきぎぬハうしのきくるさねとまき

和名ニ背子形如半臂無

腰云ゝ腰あるまほへくまにど

きちねとほうてんとく

ちへのさいねのみる

表衿乃はもし桃の葉萌黄

表衿中重将も大臣大将

ゐるるとも菱をつ

年乃時ハ白き浮線綾

窠霰の浮文を用ゆ。

裏ハ紅打　平絹也下略

おなよう

桃内葉萌黄赤大口生平

絹紅の濃く用ゐる

濃壮紫糸小口濃平絹也。

名目抄云大口ハ生平絹で

幼年月白長年ハ紅て

故殿の御事　入道関白道

隆公薨しくはしのなし

長徳元年四月十日より

薨の御事も物語にあり

あれもうへ乃きさねもちゐさいふべし下（かうぶり乃ある敬可用也）

がさねをよし。又わかうちあげさかハらち

ひろくれハそ名とはちきちし似しね（足をいとかくれて）

きこえあげはきぬもしハさやう乃物ハ

うぶうろあでも又うしあとよろけのすへと

いひのまるをいてあるかしきてハいそし。（はかま也そハみね様の種也）

ねあひねどいつくあよあれ縫乃ゆわろ

うんおひよこう粉のうへたちとふう（寝のきんハぬりんとしおきりのうすき絹也）

こおもひさるころざあまでいひありしこう。

わかしまろへもとどろれるしの

故殿乃ほとめ月この十月清経佛（道隆公の忌月也）

くやうせさせすひしを九月十日きき乃

月と秋とを云ふ
朗詠に菅三品の句也
南楼翫月之人月与秋期而身何去 文粋にあり
願文の句也

ふみうけらのままかひ
兵部卿はるる御流吟
のすべてのことは又希有
の事なるを何とぞいかにも
いかにも大切の事とし

流行しかく世をさかふ上達部殿上人
いとおかしかりけれバきんかうじょうくぞさく事と
もにともなしそれぞれに小松の衰へて
あまじきさわるき人をもみなあふかり果て
酒のこと詩じんしあとゞするにぶん中将さ
のそれ君が月秋ときいたく身のそでみつと
いかすをうち出しなりしかバいつこうめで
さしぐそりしおすいいそてあいらんぷる
ますあがわあまつるかりしに立出させまひ
てめでうしあふかみづうけうの事にいひ
さるすにこそなれとのあるすれバぶれ
をけいしみそて、いまもいんさしちまうの待

おすてさおかゆらん
秋信法師は心ある中なら
れば法師は一人秋信とかで
さく知らんとおもはれ
の事也
わざとしもひてもそなたるべ
秋信の法師を継よりひそ
てもて又自然のおかるぞよ
くろうしみまの事と云也
殿上にはまおふれまた
今秋信の殿上人それは
おもしく御らきこゆる時
至りつらで昇進の
ほどぞ殿上にはいかたるに
時はなるひ出りせんと
也秋信南友は中将し
行しも 勿論のすこし
きもいひんのちかハ 其の夫と
とちりてハいひて秋信ごと
おかまりて事さなし

はもやいとかそでしてうかひ待れと
さこしてさお参りでおりてさおおゆらんに
たれせらすわざとよびもいでそのうち
いふおうそてハあらうすねをすわりちかく
いうつひのをぬけるのふまくこそかひ
さるさみりハおしずとまりするとて
いやうてあんざいわ年ごろよ成ぬる
さくいのらそでやむをあし殿上にてよ
おけられあさきれぬとおしバ何するあらり
ひ出りせんとのあへハいはしや可なれ
きこ事そもいつねをさえもいんのちかハ
えみめなかげれが口おしきことせらへの流お

いとてかの白をきるべし
人のおもふ所は丈夫なる
男のうるはしくはいとがか
めきらるべしと
所をふかくもてひかて
かやうきわをもうり出
こなりふをもかもてひ
みくうんとこの器とて
所りあやまれを綱と和
ちりやうり乃
それがおくるすべこそわる
丈ぬるを人をおもふ
きゆへ紙はきをうりと
このこしばかの事や
ちよ人と思くいうと賜人
こう乳をこれ。それを作
とはあるこけうとも畢
竟はこの通ちがさ紙を
これは乳むこうきを
かくこうまるべし
きをにきりのひて
行成中実職とて法か
こうこうはいまし

[illegible]人とをしるを誰も侯こうこうもふも
やくとあつまりてわやきこゆる
いとでこうこうはいとがか
めきらるべしと
出まてひかて結るん物をとこへばわるひて
女房の名 丈夫の名 他人よりわるしもはれは是人のうもを丈夫
ちとはこの人しもよろうめよりわるよりおもむる
法の用
ぐひかりわとのの乃ぞれがめくうずはこう
方引 見頭貴の名
あるめ男とと女もけぢりきを人をうさひきこふ
絵ヤ人の名 人のうもうれをこうれをこれは法の行きと
人乃こうこうはうき事をとうへばこうこうちあるる
法侯の名
がわびきこうはるかりとこへばのこうしげま
乃こうやとこのの乃ものなう
とうのべん 行成の中乃物こうこう
行成乃きこまつうるひくぬぐうず
禁中乃法 法の名 禁中の人と
きのふよ。きいとこうねあすはこうのこうこうよ
丈乃内 丈乃内 禁中の人
こうこうべうれぶうこうあうあるわうん

[illegible]人乃のこうやこう
紙屋乃人
紙屋乃人神くこうの紙
をすきはせるを通とこの詞
乃わくこうやこうこうん 紙
孟嘗君が
國食関をこしまし 孟嘗君
百人一首の云孟嘗君とこ
しへ秦王小をこれ小をこの
かぶきれその名小をこの
関鶏の鳴ね限八人を通
さす。孟嘗君が三千兵客
乃中小鶏鳴とこれ小をこの
まねをこうこうこの物をこ
れは漢の名もいそ花源
る関を鳴て通りこうこう
[illegible]史記列傳十五之巻

とてまいるこうのひねぽとめて義人乃からや
かみひきこうこうねこうこうほ乃あこうこうこうこうこうこう
る心ちあんする。衣をこうこうこう 通乃の名 芳掛侯
こきこしあのさんとせこうとこうこうこう
鶏こうこうこうこうこうこうこうこうこうこう 東
表裏 久乃こうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
うんよ事乃こうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
かこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう 孟
常君也 ゆさを
さこうこんこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
ひこうきこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう

夜をこめてしるの歌
後拾遺集に入る言音云へる
これハさかひなるこれ坂の関ハゆ
あさしとハ名あるべきゆゑさ
じとし。想の心ハ明し。扨函谷
乃関とれ坂ともやらふらふに
一首にある出るさるまする上ま
の玉わざ。又にて逢坂乃
よふこらふ羽ハ晩写し道程
別云庭後さにし仙の鳥と
さがりの女にしけ逢坂ハ函
谷としらくにゆるす由もなし
彼行成乃庭源く帰りて
心歳さやらちるをなさるハ
さんしてれあるのことに侍れ
てと仙室の方なるとさやの
仰にふるがれて逢御じ
との口をぞなし
かふさるハ人らしやさとさも
此通方の心は清少の仰のある
に逢坂の関をゆるさじと云
れとうけ名あるかれそ
るをそのうし。此関を
おのがつとりやまやを
うぷきのゆ羽おどらう

世にあふさか乃せきさハゆるさじ
心かしこきせきもり侍るなりとききこゆ。さ
ちかひより
行成の返し
逢坂ハ人こしやすき関なれば
鳥もなかねどあけてまつとか
とありし文どもをそのめのハ隆国僧都乃きこえ
ねかひを行くはきてとりおひてきのちく
乃ハ清少人めくぞさてあふさかれこそ
よみへされし。みつをせず成けるとぞ
わろとまりをせめふざさて清少人ハ殿上人よる
見てハとの心へばかりにおかりをりとうも
これそこうちわれ。めでたき事ぞ人の

ましてひやくんなきさ
にかけていはさするなる
やすずに逢坂の中なる
まいむつしきなるがに
ようわい出あるなむし
のちくのハ　まかなう君
乃あきたハとの名と逢
坂ハ人こてやまやのとし
殿上人とらえてしハ
清少のまうさらんの手や
といひ。徒をこめれとよも
名どもを國なるへ出して
人こまた行成の名せすると
まことにつかしくれとハ
行成の我をまた天にかとを
とかし文々人にかなせぬひ
しわらく知るらくし。を
清文ハいうしかくして
て行成の文みぞすぐれ
文ハ僧都のまちつせの
こころざしの程をくらぶるる
すりえずれし行成の清

そひは人ねハひかきわざとりし文見ぐる
しられて清少文ハいかしかくれ人よ露ら世
侍りねざらしりをくらぶるにひとしきこそ
ハともへばかり猶さひ赤るにふるまれ人こふ
みるとも人とぞいふなりあふらうたりずと
例乃女此やうにいひとるらひつるなどて
いうり笑語こハあそぶよろこびをころめ
あそびよ
我人ぐるまきる絵をくにかれたと細樋るやと裏と云
我文を人にみせするり清少のわるのいふんとぞう
れの人にハみせねばそしもいう積しおまそぐめの
のハ後々に見せかせし上にかくしるの裏と云と遠
行成乃人にみせずして絵をかかす故し我が人
さかられ思さしハひとつそしぞてさりかれと

ほとゝられしくぞおもふ
やすりのふ心を入り
かくおかれて焼くといふ
らんと実よのかさで
まで被清かの行成り
ひし事ハ皆うちとひ
まるうちれとしてぞ。
経房れそうよのむじやなれ
やりとりよやと付べし
かのかはのふあるよ
只わかのふが焼きにあ文
かつ人この手なれ給ふ
あハ二川焼きとや。
それ實に焼きぬハお
らずさかれし
それハめでしらいなのす
のやうに　それ経房清女乃
戯こゝとで事付らく
焼き事二つと侭ふと示

行成の詞
まろが文をかくてのひたる文投けりき
事也。今日ハ心うくつくりて今よりも投
投げきてんまでのまたひとく候よつのかさ
乃中将以安ハいづらおれめあとハさりなん（経房乃詞）
や。一月乃文れ清女ぐにあたりけるとぞ（孟嘗君のこと）
かうのふおそ人こ乃おかしくてハいとしく
うまつくあでこまかやうよのおもかしこ
焼きさ事もかく何のこそあめの
あるそり。文お人乃中よ侍るなと思ど
又ハ。されをめでしらいおのおめさや
まもよろこびのふるこの事よ
△又月だかよ月もあくいとてきさ

審　え?ふる詞也
よろくしふきハや
召てくやうにきく
なそくきりし人を
よぶ也し
おいこのきみそう
おいハ何おぼし宛也
此君ハ竹乃名也晋の
王子猷空宅の中なり
寄居してて竹を植て
諷詠して曰何可一日
無此君この事よりて竹を
いふやこれ殿上よりて
殿上人達此竹の歌よ
まんとてきたりしを
清女よ此君といふ詞を
先せられてかげてるとて
てかへる詞
よびいでてを　女房など
よび出しことをも
まんとのことろし

女房やかうてひめくてこくて文ハ出
て見よれいあてすいふハ詠みておもせられ
まいてこハよろこびてあふきハやらける
ハとりて扇としいとてみとをそあそて
うちてかりつるハこれ竹乃えこおれ。
おいこのきみはことひさるとききてこ
やこれ殿上よりゆきてうへんとて中
将新中将六位どもあてきこゆるハいお。以安
そと頭りおひてやさていぬる後とも
か家。おまへ乃竹を折りて歌よまんとて
つるを忘ありまいりておもしハ女
房よびよび出てとりひてきつると

行成卿も書てゐたるを
清少ハ行成卿も書て
殿上人皆これハ此君子と
いひし物なるし
此君とせうしけて
朗詠 藤篤茂 晋騎兵参軍王子猷栽而称此君 これ本朝文粋十二巻 修行成書と いへすを賦する詩序
乃題也
殿上まで いひきつる事
のわけなるてハ
定文此君序を 舞ふ雨
むといひ期しける事を
もとゞもてゆるしぬ
まいしいなる

(清少のこゝろはくとはいひしなり)
それ行成卿をいとらくはいはれていたるて
うおりしかれば それが(清少ハこれをうるひて此君を書かれたる)へを書りて人のおへ
てきるべくもいいぬ事をバいかゞあどめる
ま人ハ行成卿も書てぬ物をあるけれし(清少の詞)(いかめし)
とやおぼしつらんとらんハぬるとなる心しし(清少ハなもえ書りしと頭弁の詞)
あどのまつぱめごとあどいひあはせてゐまへ
あまは此君こそせうすとて詩をずして又(中将頭中将まその師吟し)(頭弁の詞)
あつかきつれば殿上まそていひきしつる(期し給末の定)
かいもあずてハあどかゝりあひねるぶぱと
行やきてころあふつれとのすへハさるるす(殿上人の詞)(その名言ハまりのあれ此言ハせきまんがまりんとの心)
にそはりのいへあるせんぱと中しあらんへ殿
よすてもいひの書りつれバうへもしきこし(一条院と)

(頭弁)
めて興ぜさせたひつるとかつる[illegible]
(此君と書りたる定)
そかへもしおもすをずんざていとおかしが
(おまり朗詠されて)
まてぞ人こいでみるとりぐふ物ぞもいひ
おそてかつるよて行おそずるすをとろこ[illegible]
(建春門也)
そりずんじてたち[illegible]乃ぢんよ入ませきこゆ
(林中乃女房なとゆふ)
(盤頭也)
はとめそていとさく少納言乃命婦といふが[illegible]
久まらつせするま此るすをけいきつれバ[illegible]も
(清少の職乃御曹司とめして清少のとりせのまて)
あるをとめしてはるるすやおほしとりせ
(清少の言)
まへバきうずかのともおもそで云出待を
ゆきあまり乃おらん乃さりあしてるまや待
らんとやせバとりきすてきとうちえ
(是ハ清少の思ふせと也)
まで見へりぱされかこゝ[illegible]も殿上人わめ

清少納言ハ 一条院の[illegible]
ままた少納言の給ふ[illegible]
[illegible]すればかくしるし
文を[illegible]
ところか[illegible]
殿上人の[illegible]
よしとゝう

さるいとすてても
[illegible]ひそみていふて
ここ一向の[illegible]事ハか
くおめ[illegible]いせんどの[illegible]

えんゆうゐんの御ことその
圓融院 一条院乃御父
帝也 正暦二年二月十
三日ニ崩せ三御とし六
御一周忌乃のち正暦三
年二月のこと
よく〳〵御ぶくぬぎ
御一周忌ゟて服衣を
ぬぐ也 院服乃後らそて
御家よ出て禊事をな
すゆゑとおり
その衣のりうて 仁明天
皇乃御宇るて今ノ叙爵
あてせし時過路 皆八
その衣よ成ぬへ昔の秋
よかへきぶるせよ 皆今よ
あり文字も拾遺四ゟかりて
月日も立ちそのて正暦三
年よめぬ哀よかるき世
こきん二月小松院の御果
ある宮こされハて下るき
ふり流えてかへせさせ給
川世の中れうすゞびかど

くりときこゑせられをぱ御いとゞしく人をよろ
こびせまつりもおうし
えんゆうゐん乃御ちもて乃年ごろの御服
ぬぎさすずして仰ハれあるよう大をおかやけ
ちかめそて院乃人〳〵も花乃衣りあどに御け
むせの御ゆすあでぞひ出るよ面いそうふる
月藤三位乃つかねよ乃もし乃やうある
わくれ乃おそさしある本れ志ろきによりて
父をはなそてこれなまんさいひそれバとて
よわらぞふおのす流ねつみあれバ院志とを
もよいろねうどそきもいてゐる志とみ
乃ねとりともりれてさらん

もとて花乃衣をかハわるれ
なと御ちれを(かわるさ魚)とと
そのもりのやうするわれハ
あかうらく笠裏きる
さわと誰方わぞもちう
すまじそてやさに
ゆんこハむうやをあらず
かやりの佳るこ藤三位
殿かくやさへぞらし掲
要されバをしたてし
そうしいり 保氏もこ西
乃胡桃色の紙と折りの表
ハ青らず裏ハ白き紙
これをぶくろそとも
后拾遺乃寿と御せその
草紙と同じこれぞすり
さいの服衣をるもとし志ゐ
志ぞの袖とハ今佗おまる
四位の表衣こ服をぶ成
院の班えんと忘ゐすわ藤三位
ハ服ぬぎし御階そぐとし藤
三位四位とわ御階せするや
山僧のせうさに雄鄙ふそし
かわりの修正

てまつらず御いみあれバえんゆうてのみ
そうはいさうてときてるとぼとそてたけり
ひく〳〵ぶち出を粉どこひく〳〵おうみそく
けれされバくるよそてはこきのおかり
こふるいとおやしと衣くあけてゆけ
ぞぞかわうし乃いとげあるおまそて
これをぶふりここと御すよ藤れ
をぶふぐへや志つる志ぬ志で乃袖
こおもそろ。あさきやしれさうわそるわ
ざりそ。されぐ志てるみのほうん。仁和るの
僧正乃まやとらへどよりもかくることのさ
ますじ。桂きれなん。藤大納言うわの

三云仁和寺乃僧正と云ハ
れ是法門の法民のなり
乃ハ[illegible]ハ[illegible]ふ
わゞのみことぎこゝ[illegible]
また[illegible]と云寛朝僧正
也ぞ[illegible]敦實親王の三男
雅實云乃法[illegible]
萩大納言 実藤院乃別当
ときこゆ[illegible]
久[illegible]

これをもて[illegible]
推案乃神のうと奏
納言乃西[illegible]二河を
[illegible]萩大臣奏聞
[illegible]

僧がう 僧綱 僧正
僧都 律師 [illegible]

[illegible]

院乃別当[illegible]
あり。これをうへの[illegible]
きこしめさせ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
むとわん[illegible]
乃法[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

小柴　伝文乃女房おみ
わりしへ
ひきゆるゝ　もりて
伝文を敷に伝乃かたち
まつせ〳〵さ恵帝と
世ちゝえん御つれど

いとやとりうまいぎやうづき
伝乳母なれば云れるこの
りつちとゝ平敷なり
ぎにえんおりも　禁岸乃
書盤面の女房の待ひ
徒カ自ぶわりへをうるよ
むしやも
文とりわれ人へ
乃使乃わりてそうて
そをうけしり敷に伝
乃女房ゝ又すれど

たゞ
どもあつとんをこひやう点かかるい出さる
つやあるとゝんあどおわせゝれば点とわ
ゝせるゝをひきゆるゞ　をりてあどかくゝる
らせおゝ　ゝまゝす　行ゝるゞひもおくゝをう
ち波ひて伏　山伝師乃生徒ゝ云ひ　ねし　おゞ今待ゝ　事ゝとわゝひれる
ゞわぬゝるゝ
きておゝ　敷ゝ伝のつゝ
の志りて　ゝ　ゝ　ゝ

ぬれるこれつみどうわるき事いひ
おとろげ乃人くるむあるるもていは
らむべきもなくず。又あるい乃吹
こりつ
人もつ
事
こと
をも
かを世よめでき物
あんじ乃まつ乃おまへ乃事は
こもふ乃ほうん。まつをとおり。まハ
乃ろきのどるめくうくとなる

雪圖物語

おまへいろ乃ろ　佐竹の
おまはおろ乃座とまる
おり。庭座ともいふ。
おまあきるるれいは
おびろのもとふあも。
江戸年六畳。作前座
事　御装束をとりて
主上出御ありて侍ふ着御あり。義人以召乃出を出て公卿殿下人
座ゝ乃くゝさて。又義人乃作せをまて便義人以下着て。一獻二獻ゝて大臣穏座
ゝ乃くゝさて。こ獻もて頂下乃公卿ゝ乃座ゝ。衛重をすゝ乃て陪従童子を
あゝて。丹曲乃毫を奏ゝて四獻ゝ乃獻ゝて。義人陪従童盃をまゝ乃て採頭の
義をもて。後ハ乃ゝ乃ゝ乃ゝ。義人ハ乃ゝ乃ゝ。ゝ乃ゝ。使以下退出
すれハ内義宴撤饌物等掃部撤座主殿掃除ゝ雪屋おり。同おり
ゝ乃ゝ。
試不
乃ゝ佐竹ゝ乃試ゝ。ゝ乃ゝ乃ゝ。ゝ乃ゝ乃ゝ。ゝ乃ゝ乃

但そもそも乃風情のあるをかたるとしてこれ
はくひいかをりてまゝ実成乃此時茶の使の座ハ小面南ハ乃時ハ又南面なるゆ
平僧物ゝ乃ゝ山ゝ紙のゝ多ハ南ハのようれば不宜ゝ乃ゝくゝゝハひゞ事ゝもや
ゆんとゝてゝゝゝやゝたゝやゝゝゝ

作せ給へる。舞人す
みて舞ひ奉りたる心
地一乃舞二人進出て
まり。主殿司ども舞
あり。舞人上らり退
竹まきのあるを。
ちり乃祖ひて進て求
ぶとまり。舞とりて
舞人下りり退く。大比
礼とやらんで。使舞
人退出く。家香殿の
馬迎と綾。建春門よ
りもれり。宴乃時の
舞ひ奉りまり。
うとうあるうし
宴乃時の
舞ひ奉る神し
ぬぎ給へる
えらびとやるう

袍の領し給へる
きしぬ乃
求まのうひ
こま山あ
いづくぐ
ひとうと
ロあれど
きしみ
御琴
江次第
乃うち
どと乃あ
撥練下
ゆ乃ち
るるま
よはぬ
やいづ

こたのあやのうさ
ひてあやとちき
ひてまひ
大比礼也江次第云遊舞大比礼也
おわひれ
大ひれの所使舞人退出
ぬぎてう
ぬぎ
右祖
ぬぎ給へる
ぬぎ給へる
江次第曰祖右尺祖袍神
酌不祖半脇下重
かりぐち乃陰くら
むーハ南ゆよ還立か
くて宴乃中ゆ
中間ゆ
云宴乃の
見ん試ん
ゆり。
庭ゆ
社乃
ゆ
ゆり
孫廂
ゆ
舞練
舞とす。額間ゆ
舞人
公ゆ
神ゆ
階ゆ
神ゆ
ゆ
ゆ

ぢうのこと
雲樹の神神樂書
歌輦神時人長五寸次
勸盃次人長進五寸男
五寸根元ふりかけ
とそ又すこしそ
男ちすこと
人長五寸　童人陪從
の考次第云童人
陪從皆起座隨人長
皆次第着座
しぐわうとそなふ
星人ハ陪おの
星人ハ陪おの
ねの使童人
わるとそなて
なすべりてそ
ぢやしてけて
社次第十次
社次第
方をいしぢ
方をいしぢ
牡丹
やりとの星人じの
袋双紙云八幡臨時祭次第
雅院御時被始行也件所
八貫之奉之其所ニ松
生入り苔むしと
末をくはへ
ろとそ
内裏つき
小板
人ハ
次ふあづよあうびあり次
上ハ
ぢ將の
ぢ
社の
本ハ
方を
牡丹
やりとの星人じの
袋双紙云八幡臨時祭次第
雅院御時被始行也件所
八貫之奉之其所ニ松
生入り苔むしと
末をくはへ
ろとそ
内裏つき
小板
人ハ

ぢうのこと
雲樹の神樂書
歌輦神時人長五寸次
勸盃次人長進五寸男
五寸根元ふりかけ
とそ又すこしそ
男ちすこと
人長五寸　童人陪從
の考次第云童人
陪從皆起座隨人長
皆次第着座
しぐわうとそなふ
星人ハ陪おの
星人ハ陪おの
ねの使童人
わるとそなて
なすべりてそ
ぢやしてけて
社次第十次
社次第
方をいしぢ
方をいしぢ
牡丹
やりとの星人じの
袋双紙云八幡臨時祭次第
雅院御時被始行也件所
八貫之奉之其所ニ松
生入り苔むしと
末をくはへ
ろとそ
内裏つき
小板
人ハ
次ふあづよあうびあり次
上ハ
ぢ將の
ぢ
社の
本ハ
方を
牡丹
やりとの星人じの
袋双紙云八幡臨時祭次第
雅院御時被始行也件所
八貫之奉之其所ニ松
生入り苔むしと
末をくはへ
ろとそ
内裏つき
小板
人ハ

第六の巻

[illegible]ハ南都ノ[illegible]ハ還ヲ
[illegible]ハ近代ノ[illegible]
[illegible]江次第ノ[illegible]

故よりて[illegible]
世の中[illegible]
中関白道隆公薨ぜ
て清堂殿関白ノ[illegible]
よりて[illegible]
伊周公と下[illegible]
[illegible]
太上天皇[illegible]
恨[illegible]射[illegible]

せ[illegible]ぬ。ほかのことがやうにんざ[illegible]バ
いかめでさうんなどすぐれがく
文乃[illegible]人おとぬ[illegible]せさせ[illegible]
あつまりとまどひ[illegible]ぶ[illegible]
てまいり[illegible]
[illegible]
まうりぬ[illegible]
[illegible]
[illegible]
人[illegible]
あ[illegible]
うち[illegible]
故よりて[illegible]

伊周公年比をこのひ[illegible]
つ[illegible]
[illegible]
つ[illegible]
[illegible]
[illegible]

あをとと桜女葉葉よ
ひろ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おまへらの居えのれうさ
よりのれ事のきこべしら次
みくぶ人をうつとゆきめ
のもてし
こてみくしらへ居えハ孫人
のおまへをゆびくほかつ乃
れ人へ恋ひせのうつ妻
ほかのうふくも恋ひ

山吹の花びら　山吹ら
ロすきされいぶそで工
ミゆさうび
いそでうつ　四ぶそ
下ゆくあ乃ロきつて
でゆぶつまきされる。
おまへのせずをうて
ロどうられいとうる首
尾うう

れいあやーさたうぬ
ほかのスーき里居ら
ふあーぶ

久とうて
さくこの
こてみ
居えの真
ぼくの
むねつぶ
うせのう
ませのう
をるを
ふひあげ
居えのれ
まれさる
おるハい
させすう

おまへらきてうち。おまへらの居えのきこ
さくこの三のびくうせーうつるこうひて。
こてみくしらへひゆこ三のぶとあまわせ人
居えの真ほかのれうこうこうこうて
ぼくの乃れうせ幸ようてあくぬるめうと
むねつぶ重くあけられぶかよハうの
うせのうこず。山吹乃つるびを大一切包
ませのうつうれういそでおまつぶこうせ
をるを入てまいうこうう日こう乃こまよ。
ふひあげられつる恋と魅こうれきふ
居えのれせうこうこと恋ほかの足あうるうるを
まれさる前をおさめうこうまもりて恋
おるハいうよ物のおりごうるおりぶ出やく
させすうう物をうてうれとあやーきし

れおがねうこのみ、うねめれあどうまいうせう
きくねるどうひくごうるるのうるる
よまうりてまいんどうひくいぬるのうり。
れみてうのれおきくまいうせんとすふの
うる乃うとれうとれうとあれうれうぷとあやー。
むるどうるすこうひいるどうぷうぬ人やある。
こうとうにるどうるどうぷひせうれぬハいう
りうやるどいうをうるくちいれきわハ
乃まへよわるうどうぷゆくあ乃とこう
せとひうるぷるどうこう三れうるうん
これよをうへうるもおうぷ乃うきハ
ら世うくすうるどうへうまいうう

おるどうるうるとうひ
同じ古れれ中みひ乃
もこうふ誰ものうこう
して事をと
こうもうるうるどうう
世作りぷやうきを事と
思こうこうこうるうるとうる
ぬるどう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いかなる事をいひ出んとてとられぬるぞ
と乃人をこまるとも思ふともなく打
まもりて居たるぞくといふ乃どいと思ふとも
なれば物しきまで思ひ出でたり乃だ乃
天乃芳切の人のうづ
しかるとゆゑといひ出でたり乃だ乃
乃こ乃人いとたゞあはれとおもひたるなり。
たしかなれいし
こまかくみれば人はもとわづらはしくあさ
ましきまでおもひてとみてあいぎやうなく
ようのわてとみてあいぎやうなくこと
てあるなりてこと
させんと思ふるをあどけなきこの程
おもはのすこあるうちにいとこと
まもるもふたの乃人がこまかひくらら
わひくやうにまもるずと12月
ひきこまかくれたるこれよ報させ

方乃人の芳切の人
方ふ定めて物の数
とこそ思ふ乃ぞ
情云奇合る貧指で
あるし天徳乃奇合を
金銭乃数の数を問法
ますべかりとさしの不
にをくぞの数をして数
をとられるとも
ひとる帰りて
隠さ事と思ふさるて能
たのまれよ方の物を
物さ事まいあれど
定物をよきまりてあ
功名りなし
ばうはあれ　ちうどに
ろうは物りてくいどまりす
ぐうの
てさわるる　罪去で
をついぐくぞ方の
今数をとひし人
さるくいのわけしく報
をのれまるとれる
られそまるとれる事

報さしの人乃芳切の人
とそれ乃ぞとおやちき事そちて
物物られのはんぢくよりどさすまりど
れど方の人とといいでんいるがて
ろんずれどちどといいでんいるがて
きくあれまるぎんとてはぎくのとひ
はるとの人乃芳切の人の
人乃論ぢくるるるうの
れど定ぬるさきのあれは方の八えちずと
ひとは恨られて罪さりくるるものを方乃
人ぢおかぎりはぢくりよべし
ロはくくさひろん
しわるくんぢいるみくわろんど
わふこれ乃ひとをれくるこるぢみる
ひとちりしるこるや

○正月十日　厚宇清水

荒

白し

平真

濃紅

半瓶

藤坊し桃の

枝の

枝の

枝

[illegible]
おのれ賽を取れと
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ねどころ　ほとめてまをそくな
らの人　きろきはきたる　すぐるさあり
くちごあ　吐乃なり
つきなどう　ひさくゆあけぬ　きぬ　昭乃
乃ちくる　ハいれもくきるみげある
中うぷねるいろのきぬこうきあげ
まれ

春曙抄七終

ねぎぶのぐうれたまく
式部卿百寮訓要
式部卿六位一位
組之ごく　式部卿
巫八二有乃巫　巫
爵　中務
足少　式部卿
とつ　式部卿
式部卿
式部卿

環翠軒云有脅長とて
別當乃召給ふる袍
赤き物表は白き布
袴をはく。白袴
て新人宮廷拝しこと
出立やげうとわ
おやうの
若ふ
保物語よ
てはみ
それ
小学云文王有疾武王
不脱冠帶而養文王一
飯亦一飯文王再飯再
飯
人
の
の
紅

むねはづる　抱

ぐ
ぐ
ぐ

ときげけまゆひする
こと乃
もゝ尻乃さゝゐるゝ
源氏物語に
ひめぎみ乃しまきゝ
ゆひのつるむねのきゝ
うつくしげさうひそえ
えのつるゝ
和秘おるむ
ゝ乃おさるきゝ小袖を
いきすぐしすきとふ
物をきゝるゝ
秘訣
あり
殿上わ童殿上と
て元服ゆるす事
殿上ゝゝ

おいとうはて。あまよろぎてる児乃同り髪乃ちゝひくるをかきこはやて。うちゝふきて物ちでえるゝとうつゝ。さすきげまゆひくるこ乃くゝれ志。ろうれゝはげるゝをえるゝようゝ乃ゝ。ちゝわきこゝ。きゝそらられてあるゝゝもうつゝ。おゝしげるゝちごゝ乃おゝゝるゝゝいぐきて。うつくしむれぐゝゝゝひはきてね入るゝ。ひいる乃でゝゝと。たちすの。うきぐぐ乃ふゝちいさきを池ゝわとゝ。はげゝくえる。あゝひ乃ちぐさきゝ

いとうゝゝぬもくちいさき物はいと。うつゝ。いぐうこゝる児乃二ゝ。ぐゝわゝぐぐきゝふゝゝゝゝゝぐ。二おゝ。ゝすゝゝゝゝのゝぐきぬゝぐゝてぐゝゝき。あげゝるゝがゝひ出ゝるゝいとうつし。ゝゝ九つ十ばゝゝゝあるゝのこれゝ也おゝゝ。げゝくゝゝゝゝゝゝゝ乃ひゝゝれゝあゝぐゝゝゝゝゝゝゝ

ぬるめつが　玻璃蚕うや
ぬるめとも云通ずる
貨源云玻璃水玉也或云
千年氷化為之ト
人ぐくとする物　人うづと
世語ういう人　人映と云

人ぐくとする
ことある事なき人乃ぐるまの
きされる。たいぶつきぶたりさ人る物
いそんとするものまぐさまうる。おる
ところ
はおやかぶてぶたるどえちてうこと
ぶたるまをぬねをひきたれるどせいせれ
てぶるまにもえるぬが親乃事る
ぶるうわをぶれ乃せるあ
ぶるをぶるどうゆるどすぶたるどぬ物ふ
ぶるきいれねぶるづう引さぶー

おやかぶて　文憲
ぬるぬるかきてるぬうり。
せうとぬりふすると云ぬて
するさぬ。
ひきたれ　引汚れた
うひきたれい引ちる
れぬし
訳のぬるる正えて
こさるをぬをる文乃
きたうりぬるる
うぬし

ぬるこうぶり
こさるれ引さぶを文乃
ぬるーるどいうりて
こうぬるりぬるさぬし
われえうこさるくもいそ
訳しさるで云うぬと物
人ハれつるくもこうで
ぬるこうるれてぬる
あるぬぶち　まるぬぶち
ぬる例うるぶし
いうぶち　穀梁傳云陽
相薄感而為雷ト
山ぬくうと　不崇雲乃
公羊傳云觸石而起膚
寸而合不崇朝而雨
者唯泰山雲乎
又不祥雲うや世のさ
うるぶるぬる市ぶ
いふぬ　未勘但土佐日記
ぬ絶乃ぬうれて蝙蝠

いぶぶ乃ぬるうぶるぬぶれぶをぬぶこみと
ぬるうぬうぬぬぬぶぬぶぬぬぬぬぬぬ
うぬるぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
しぬわれえうるぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
うぬるぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬるれ

名れうるうぬぬ物

おぬをぶぬち　谷乃ぬ　ぬるぬ
ねぬぬぬれ　いぶぶちハ名のみあるすぬうう
ぬるぬぬ　ぬぬち　ぬぬぬぬ　ぬぬぬ
ぬるぬぬ　ぬぬぬ　ぬぬぬ
ぬぬれとぬのみぬるぬぬぬぬぬぬ
ぬるぬ　ぬぬぬ　ぬぬぬ
ぬぬぬ　ぬぬぬ　ぬぬぬ

賭博家の名

名れ　和名暴風ハヤチ
土堤　牛ハ徒月ハ三ハさあ
蝙蝠　簑長れ囚獄正を
縄筵　強盗

鮨とゝのへて蝙蝠ハ見せた
和名抄為其類似蝙而大
者也ゝ

ひぢかさ　梁塵愚案抄
云傍ゝ

いぬびわ　神を
いぬざくら　河海云

ひぢかさ　地楊梅
ぐちあくいちご　いぬざくら　茨
をふわらび　むらさき　択親
ぐちうん　牛頭馬乃のくらし
ぐちふ

いぬざくら　霞盆子
はゆらき　時分なと也
ゆらき　英實とかゝわ

いちご　霞苔
本草云英實艾葉三月生
葉節水大千荷葉面青
背紫莖葉皆有刺下畧
えんじやくさ

胡桃
くるみ　くるみ
くるみ　くるみ
くるみ　くるみ
くるみ　くるみ

文章博士　史書詩文ゝ
よむ人也　令義解云文章博士
皇后宮權大夫　藤原朝臣華族納言条議及三位以上兼官
乃市内を管領すゝ權大夫ハ大夫のごとくはあらねども

虎杖　和名
小伊太止里ゝ
ゝ草の名
ゝ本草疏ゝ
虎杖

ぬひもの　繡乃絃
和名云蔣魴切韻
云繡以五色絲刺万物
形狀也

かなぐき　狐腰来粘
衆乃ゝ
付ぬい表の縫目
ひきゝゝ
ゝ也地乃ゝ
常ハあるゝ
ゝ
ゝ月の
ゝ

ぬひもの　ねこれ
ぬひもの　ねこれ
ぬひもの　ねこれ

をのさむる日。黄八ま八
ひとりもの。ゐる王垣六本ホ
打ゑをすへ一の臺よ
解大根物をとる。下畧
行事れわのひめきうち名
東賢子也。五事根源う
ひめきこもうう。元年
女叡位ま叡爵をる仮
姫大史とりゆ。五事
根源云あづまわ〳〵ともいふ。内侍司乃
きてうう。年て供ゆすることれ。ぐまる
乃ちわにゆる由史続ゆ作る姫ま
をまもと。ゆ。ゆ者ま同一ゆ事をお作〳〵紀朝臣事明と名のるまと
ま事わ乃義人　節打乃令姫ゆ。ゆ。六月十二月時る代。年打の令姫竹
をおてまうりて。上の作ゆ者ま姫ゆて不ゆのすゆを云墨て。云ゆまにまわ作
がゆせ〳〵た板をつとむる。お〳〵〳〵ゆ者ゆて二度おう。二度墨て祿をま
節打をよゆまちとゆ竹ゆて作ゆすゆをまりてゆまゆゆてゆ。ぐゆと
ゆる根源ゆあう。延喜式義人式云。ナ二月晦日諸司供奉荒世和世御紫宋二同
六月云〻又云孫廂南北両方立作屏風其小作屏風お鋪小莚為節打義人座
ゆ作屏風あう。常ハ小さ〳〵ゆ者の代時座をりゆ〳〵ゆ者ゆ作ゆ圖ゆう。

ちきりゆ。六月十二月乃はごうう名
ようわの義人。事乃法讀經の職僧師
あうげさ〳〵きゆ〳〵僧れ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆあゆ
るいとらう〳〵。法ゆ〳〵ゆう佛名
あゆ乃れさうゆ〳〵乃不れさう

被ゆて行者れ時ひめれゆて行
姫ゆ叡爵ゆる仮
根源云あづまわ〳〵ともいふ。内侍司乃
きてうう。年て供ゆすることれ。ぐまる
乃ちわにゆる由史続ゆ作る姫ま
をまもと。ゆ。ゆ者ま同一ゆ事をお作〳〵紀朝臣事明と名のるまと
ま事わ乃義人　節打乃令姫ゆ。ゆ。六月十二月時る代。年打の令姫竹
をおてまうりて。上の作ゆ者ま姫ゆて不ゆのすゆを云墨て。云ゆまにまわ作
がゆせ〳〵た板をつとむる。お〳〵〳〵ゆ者ゆて二度おう。二度墨て祿をま
節打をよゆまちとゆ竹ゆて作ゆすゆをまりてゆまゆゆてゆ。ぐゆと
ゆる根源ゆあう。延喜式義人式云。ナ二月晦日諸司供奉荒世和世御紫宋二同
六月云〻又云孫廂南北両方立作屏風其小作屏風お鋪小莚為節打義人座
ゆ作屏風あう。常ハ小さ〳〵ゆ者の代時座をりゆ〳〵ゆ者ゆ作ゆ圖ゆう。

事代作讀經乃職僧師　事代作讀經乃職僧師
經を四ケ月作〳〵〳〵。江次第首書云事作讀經春秋二季請百僧於南殿
讀大般若經其内定作前僧七口於作殿讀仁王經下畧職僧師八代〳〵ゆう彼
法法義〻仁王經をよゆ〳〵ゆの法おの作を引〳〵入るな打の作。江次第五
事作讀經の打〳〵職僧師引法前僧入自明義仙華門〳〵。西宮記云南座
東端職僧師候前居磬〻〻圖打〳〵山高打
打げさ〳〵〳〵　官職便覧云延暦十三年九月三日延暦寺供養記云奉行僧
二人職僧師從僧師始鼎赤架裟〻
作の名ゆ〳〵ゆ作ゆ。江次第五事御讀經事云
例文置上御前入年〻僧名名僧帳諸寺解文外任并死去勘文等其福
寺延暦寺等賢義者注文。近例去年僧名上押紙書付今年可請定之僧名
法〻〻〻作名〻〻の代〻〻〻乃下れ元　事代法讀經〻〻〻〻打事
の義人法法殿をかざり。弁南殿をかざる〻〻〻。作〻〻〻〻〻〻〻
事〻〻〻〻義人奉仕御殿御世代東弁奉仕南殿世代宋〻〻〻事代讀經事
江次第十二云御作名當月世代宋等如式下畧延喜式圖書寮云御作名世代
東御持作一龕蒔繪案一脚供奉帝花香
式云三ゆ作の作二鋪十六作ゆ經一アゆ金銅花盤二口。大炉一口下畧
かゆ〻〻乃年中行事。かゆ〻〻〻乃〻〻〻〻〻〻〻

寄合注云、ものゝ所ハ二月上の申の日也、ものゝ所の日勅使ハ行、近衛の中将ハ行、これをつとむ。注如天皇、貞観元年十月九日小姫ハ行ゝ。

ところのあゆみ。

二月の七日

うづゑ

つゝ

みてあげ。

節会

大饗の日

大饗の日、史生。七月の十日

市女笠

かんどり

馬寮の使ハ

ひきめ

社をめぐり長者

人ども。

近衛の官人

馬寮の官人

大饗の日、史生。

市女笠

わらはの笠

中務省。

中務省。

大饗の日

中務省。

中務省。

大饗の日

大饗の日

大饗の日

あつめて。七月小れ機節とい
て。名合せとて。ほすまくとて。ぬきてとりす。そこ法華八
江法華寺。雲。雷おろす。雷おろす。そも。ゆ。きぬのけおろす。

○ちごけ。

○花嫁きといふ。猫。ちごけ。

○ふ

人。わ。ちごけ。ちごけ。ちごけ

二月むまの日　口伝
貫之集第一云　延喜六年月次の屏風の歌
乃中に　二月初午なる
日まうでてとてる示
独のみ祝こそすれ
ちり山まの露とれ
とちくすん
坂のちくつろ　いとうの
上の社八今の社奥十
八町ばかり山中にとも
民人ハ二月六日より糸
ますけ。陪ちぶの酒を
ことをのみのまの
七度まうて　一日七度

まうつる人　縮花八七度
多くしゆ信心ゆゑ　拾
遺集二郎のあるうて
すあハいろ山七月の月
ちくしとかるうんとよろ

わんぎくのがるわぎよつさくうし　他の人ども
げもあくぞとれくくとんてくるもの
ぎるのぷうゆきうちもてまづる
いとうやまに二月むまれ日乃暁よ
ぎ坂乃ちくだりあいとうハ
これ時ぐうちりよろわやうくはの
つさありてまくに信ういらぬ
人をせあんとのをぼ去ようでは
らんとまで減おちてやすむもう。三十
あるりいぐりある女乃はわけうぐち
ぐちはあるぬまを　彼まの
七度まうで去ぐうぐ。九度
四度ハこうもあるずひづめとト向去
ぬぐしとぷるのひくる人うちひて
ぐわいゆきこうぷ。ある示てハめとあ
あるぎきこうぷ。ある示てハめとあ
らぐやとおわるしう。男と女ハ師ハ
ようさるとちくる人いらぐう潘ト
ぷけあぐくうるちうぷぐわぐあめで
しき人ぷやんことちき人乃人よりづら
きすつをいとうやう。ようくき
奇ようくよけくぷの杉みもまぶとち
出くうくん人ぷよきき人乃住およ女房と
あるさふくふぷうくきぷ人へつらす

よきき人乃住おる
もちわ彼ようくや
人乃うくやうきき
すをいう

[illegible]
[illegible]
[illegible]

こころとちがき地

人乃こころとそれ乃こころのぬひはやりく
行りどゝ（来れ共なを）拾ひよこぎこ出くゝ（ぺうやくと）
こゝろ居りて（ぢとをもちこゝろをもつて）あるこゝをもつて人
おもひ（ちまうむべき）人乃ゝどこるゝまで
ゝるこゝ（ゝるこゝ）きこ乃ちあき。きこ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ人
乃こゝをえて（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ

くるまをぢ（車の）ありくとよろこぶ。
おざ（茣蓙）ゆりいれることを口ぐち（口々）にいひて（言ひて）ぢんとてあるよ。車（車）はありぬるんなど
ひとをきくこゝろ（聞く心）ばへ（映え）れ。みうこゝろ（御心）
人のちゑ（智恵）とくき。ぢんとやう（陣屋）
ものゝ（物の）ぐ（具）でまさるもいと
ものゝ（物の）ぐ（具）でまさるもいと
まくぢうしてしいねぐ（寝）ぢ
ちゑ（智恵）とひさし（久し）
する。
人乃奇のゑ（絵）とくすぐ（過ぐ）ぎとゑ（絵）ゑ
かどいとゝとゝ（とと）ぢけさうべ（化粧）ばさう（様）

こゝろ（心）ばへ（映え）
ぢけさうべ（化粧）ばさう（様）
無恥人乃表面（面）
しわ（皺）ばみ（歪み）せて（寄せて）
すぐれ（過れ）いさも（いさ）ぐ（ぐ）ほ（ほ）
ぐれ（過れ）どゝ（とと）見ゆ（ゆ）

わ（わ）ともあり（あり）とも

いくもぢ（くもぢ）れど（れど）ゆつ（ゆつ）ゝ（ゝ）又（又）ぢ（ぢ）ぐ（ぐ）ぎ（ぎ）わ（わ）を
ありプ（プ）ゆ（ゆ）て（て）女（女）を男（男）しぐ（しぐ）ぢ（ぢ）よ（よ）ひ（ひ）ゝ（ゝ）す
かどパ（パ）ぢ（ぢ）きの（きの）みこゝろ（心）ばへ（映え）ぢ（ぢ）ぐ（ぐ）よ（よ）おい
あくひ（ひ）ぐ（ぐ）車（車）と出（出）ぐ（ぐ）ぢ（ぢ）う（う）。又（又）ちの
ちく（ちく）ぬ（ぬ）れ（れ）ぐ（ぐ）ぎ（ぎ）ぢ（ぢ

（注）イあてんをとハ
約所ゝや

時はるさめど　梅雨の
漏剤博士のゝ。百療訓
要ニ云漏剤博士ハ漏をつ
かさどる。晴雨の時を
伺て漏水乃うつるを
まちくゝ時をしるく
ちる職也。職員令云
漏剤博士二人掌季守
辰丁同漏剤之節。
守辰丁廿人掌伺漏剤
之節以時撃鐘鼓
うきやうのゝり
新古今　うきをなりの
のゝりて　れハ鶴立
民のゝ　とハ雲ひろ
ゝ　仁徳　皇位を
東野列注云ゝうき雲ハ
梅紅　ものゝ

おきあくさるこをもれいゝやうるかしをど
をちぐゝぷめ　四方ゝ出簾ゝ
ゆゝるゝ　みをぐゝ
ゆゝるゝ　女房　ゝ
なうぶぜんざいゝ　菖蒲草
ゆゝくゝ　ゝ
かをちゝ　ゝ
ざいゝ　ぱぱ
まゝ　守辰丁ゝ　時の
をゝ　ゝ
あゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

詠よむ　秋信乃出
詩をえらび　昔のふと感
ずる詞

なつかしの一首
弘徽殿乃扉の牙
あかねさす戸口ぞ。
保氏不憂よ。この口あ
きたりとあるべしと。
長彩物云弘徽殿の東
うわうの扉おりつ
きを細殿とふ。
よのくせ　なる戸口。
南の牙ふ　あるべ
あるべしと戸也。
又中ね　保中物　おりとて
秋信と密夕ふ
露の別のなみだ
菅原文草五云七月七
日代牛女惜暁
露憑別涙珠空落
雲是嘆眉斜髻未成

かつらぎの神今ぞ
検遺　思ひのよしれ契
[illegible]
[illegible]　役行者金峯
山とぶきこのたふ
をかくれまつ
神のたちの手　故
俊と俗　[illegible]
る寺　ぴ双紙の
明くられてかくれ
しかくれたる
信てつくり
わけくれり　あま
露の別のと吟じ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

秋信の[illegible]
われ乃すら
てやび
[illegible]
[illegible]
かづきれ神今ぞすぐちきとてわけく
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

月ごろつゝしみこもりゐ
ぶ月ごろはなれたる女房
[illegible]
しのびつゝ
後ゝのちすきぐしと
女房のもとへもまゐり
[illegible]
[illegible]
[illegible]

安信卿の家の別の院
こつぼね車と云ふ
しを感ずる

詩をよめり

安信の朗詠よく上
手なりけり
其のやうもまことに
そぞろ〳〵しかりし
ものなり

さうそつけいのことばや
朗詠に蕭會誓之
過古屋詩締異代
之交云々朝綱の交友
乃序のごとく今宵乃
太守蕭氏真の手れ
ば質をたゞしてこを屋
うりあるべしも

いまぐ三十のころ
未逮三十期古稀の
ほどなし来年全文

そし安信のこと
一条院
寧相ゝ
ちわのひとせうへの
ほか
詩をいとやうずんじ作
らるを
せうそいけいのこびやうをも
みるぞ
誠のいひ侍らんとする
ちぐ
宰相ゝ
帝
ほかの人
ほかの人
ほかの人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前漢書六十四は朱買臣の別傳あり。こゝにも引き出し

しきでんとは

弘徽殿女御義子乃

事し。兩院太政大臣公季

公乃母也。一条院

乃女院

ほとゝぎす　宿直也

ほとゝぎす　中宮

ほとゝぎす　女房

ほとゝぎすの

あくるねぶとえばくるまさ

ふらめぬ　我小体不ゝ

ふまめりけ　女房まのたち

ほとゝぎす

ほとゝぎすの

ほとゝぎすの

ほとゝぎすの

れとのぶてれうみのまき

殿上人のわらはてて殿上人しはしるかわて笑ふ殿又はかよはしてみをひいもとさてはひとりを振殿上人し笑ふとらてば殿が一人はうとふべきもあるもをおやきくかこちのまとしもうはてはうて殿昔れ侍はをあづ不用を殿そぐりしさうぐんべりのまし繧繝縁畳

のまをあんいい侍ぬ人乃ゆぐるみまきあをこいくいきいうみうぢほもも殿人よちぢかあまき車云

ほそまてうてて殿上人乃わふらていい出てるありとのあへいさてはひとりをうみまふべくあるぎめるあやしーあどいへぐのちいてやみまひうり巻

むりあるてふうある扇

うぐんべるれてみ乃ありてあ出きるかるこ乃屏風のかてうこかれる萩のうまる松のまちすりの扇 白き絹よ差出るれこんをすりくるし

ちのの日くきし侍士絵師 法出二或あるべし

ちいろめのえひうり蒲陶染薄紫家ハ桂の灰をさす扇あれハぎるれさめるれを灰ひとりまほちまあまなりて誰をつくろふ扇もおきをよくやうり

取れうち 取離 六位のうら ちろまさ

ふきハ来れ暴進乃れもあれどきるハふのもしばあきこ人のうちぐるま人

かれるぢぢわ乃扇花ろうる。ふだれめろききちやう乃ろびるのふまめる。帽額ちから乃ちあるちりぬる七人の乃ぐるあるる。ふびぐめのえ扇れきるれ。きこのこれきるれ。白き家乃まぐら焼モのきやける池をどいさふぐあれどうきまふ

ふみをしげあきこの

ぷんうれうちて人言れうちあるむこれよことする人乃さする人乃まあるふ

六位乃から ちろき。え

のりと読んでも
事を成就せんとす
るさまを
経ハ不断経
なむしゆしゆじきの
あうぶをぞ
大車うけ
る。一
未のちけとあるこきさし
まるかけとぐ六
六七八十ある人乃こゝちあうきく日
ごろうまりぬる。風吹きあがる
ね。経をめぐんぎむ
ちくてこをきき
えんれんのさとり
ぶい春日八幡ぐ
をきゝ示とゝ伐式ハ
宮中おてあれハ近く
てききあるべし
ゝのつらゆり
九れつ（つらゆり）今鞨
ゝ七曲（かり）とふゝ）近き
ゝとまるものれいをき
せ
えんれんのうち
ふみち、きう
ゝの時日む月一日のれど
ごをくてちきき
ごくらく、毋乃乃、男女乃中
阿弥陀佛去此不遠（スキテ）過十万億佛土有世界名曰極樂（テフ）と読きゝ
毋乃ゝら 三四十里乃ゝ乃ゝ凡よき河ハ一日一夜ゝもゆくやう
男女乃中 男ハ陽女ハ陰ぐびゝとあるゝ物ゝ夫婦会釋の理をゝて近
ゝ
山乃井さゝも清き
万葉 武蔵 香山新さゝ
ゆるゝのゝ丸清きゝ
我ゝゝゝゝくゝ 大宿
沢ハ清くゝ人をゆふ
物ゝハとゝゝ陸奥。
れあゝとあゝ
あすゝゝ今もひもゝ
世ゝ京 飛鳥井よ有
ゝハすべしたゝゝゝ
もひもゝしゝゝ家
もゝゝ 飛鳥 ゝあゝゝ
みゝくゝハてゝ家ゝ一説 飛鳥井ハ
せゝゝゝゝ 竹橋井ゝゝ 烏丸の東
橋井 山城 平安城の近辺ゝ 猪宵乃
きゝきゝゝゝ 石町ハ常寧殿よ
ゝ夏の井 八宇にちぬきのみゝ
受紙ハ 宮内ゝ
井ハ
ゝゝゝゝ 走井近江
しき 山乃ゝゝ
ゝゝゝゝ
さゝゝゝゝゝゝ
井 せゝゝゝゝ 橋井 き
ゝきゝ 夏のゝ
受紙も

紀伊守　上国ハ従五位下也。和泉ハ下国ハ従六位下也。皮位令ニ

紀伊守　和泉

やどりの守　つくしの權守

環翠抄　舟橋殿ニ伝ハ原物の私物ハ宿官ハ官ハ記ハ官ハ

下野　甲斐　越後　佐渡　飛騨　信濃　但馬　但馬ハ皮を有ず故也。飛騨ハ云權守ハ者近代多是遥授也。環翠抄云遥授ハ云ハ遥授ハ云ハ權ハ也。ハ四位ハ五位ハ皮位の者也。又曰權ハ地下の五位ハ云ハ但馬ハ皮ハ也。又美乃守ハ国司番職雲客ハ

下野　甲斐　越後　佐渡　飛騨　信濃　但馬　皮ハ權ハ

大史　侍の叙爵ハ也。大史ハ侍ハ叙爵ハ也。

大史ハ

武部大史　左馬大史　史大史　六位義人

ほのぼのとゆふ日の影ハ權のるまとおぼえて

左馬大史　左馬大尉ハ六位ハ叙爵ハ也。左馬大史ハ正六位上ハ五位ハ叙爵ハ也。

史大史　左右大史ハ正六位上ハ五位ハ叙爵ハ也。

板屋せばき家をもわれもこひ坂

小板屋

車やどりの面

あどの川　あどの川ハ近江ハ有ハ也。牛ハ

ぐせて　ぐせて牛ハ

いとすかけわたしてぬの乃ぐいりて

布

住居する　住居ハ門つくさせるとる

をとこ　をとこ

心ばせ　心ばせハ

ありけ　ありけハ

伯父

おや乃家　おや乃家ハ

男乃家ハ

ちかあるのすまぬいへ

ちかうもいきもちきこと

助

さるべき人乃ちかうん　さるべき人乃ちかうん

第ぐしくいとす

伊とう簾をむしたきの

革ゆくみ

おやの乃家ちかうと父

そこ乃ひ彼ハつくさせ

ちかひしるしぶきき

ちかうく住ぎ家を

彼初めてう蓋くるや

ちかるがようきこるとりて

ちかうくとるく

ちかつげけり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝろく人やゝ
人出るいるぐさくまを
いひてくれ門ちぎの
おやハ出すてやこのぐさ
うぐふとぞの供人乃
わりのてまれぐすも

ていろるこ出ていこれも
ちくり出てけりふち
すぐこれぬくもも

あてけねこもあやう
うるる　和文て門の
男ものあやうきこゝぬと
く寝て門させんとて
わくもはうとしゝぬ
もはういまゆゆて門
させんとて いしぶ本
てむうや
あけねぐきくきへぐう
うぶのれゆて古

させぶごろいぬとべいとゆうわるぐいひ
るぶ人のうちきくくもまるうきとこゆ
人乃ともあるよのぐれ
くくもぐれ人やゝ出ると
をわくくふべうゆうぶねうちすもきても
門まのきくくいるてぐきびきよいひとぐゆんぶと名ふ
ぶくくいこぬもゆりふ心あきく人心きこぐ
やするぐれどすくくよのあるうこぶあよ
けぬ門もあやうあるとひてぬる
あるもぶきくくうゆ心ざくことあ人ぶこゆ
あどあるこびやうれどれ居あ
せぐぶくびくあるくよあぶぬぐき

あのこんすくるくき
を門ちぶゆくくる
人くとゆりこ
こぶいらいこうとあけ
ひくけく

古語本動

おやういわるハあをう
歌乃ちる人ハ門もれ
むくくきわれて
ゆくくうわれこ
ふきくあくくはくはん
見ぶのゆうハれぶ
ふ人うぶるうの
つゆうくんと
何乃ふうわるの
うんでふを文うあ教
原禁命ちの教乃の
ぶひくまぶ
人のぶわるのる
の見ひてきく人乃
まうのちを

ぶくきをめづくのにうひくぶくきを門
門をこうひらいきうこあけひくけく
とゆくくくおぢきあく曉くう
さすあるぐいくみくきぶおやうひゆるハ
あをこうなれぶてまくとあぬぶふ
ふくんときへぶまうてせうとのこ
あどもぶふきくくうハはぐはのんぶ中
あのくきこあくぶ門とぶぐこくはく
何乃文門くわ乃教ぐくあくく人乃
ぶあひあどくくうしあどもあげる
ぐくぶみれ表をぬあのくて人乃そで
ぬるのちぶ見いぐくくるこくおう

人のうへをもいひ所をねいとれぬるをよりとへ乃人の上をとるか所やまかをもしの
ふをもきくねろ
ゝ

くれぬるを明あぐるまてすてゝとあり。笛
あぐ（徒）ふきくの人のうたきくいでぬるを。我いつるぎてゝ
ねれ。人乃うへあぐるいつい所をぐ
ゝわきまにねいわぬるこゝろ
しくれ

△雪乃いとうくいあてうたちつゝ
わるあぐるいとこゝろなし。雪又
乃いとくゝ降つゝくれたり。
をわうう（かゝ）ぬし（ちゝ）。雪る人二人（ふたり）だうわ
火なけあうすゝくぬぐわあどを
るゝぐゝよ。くらうあわねぐこゝふ
を火ともさぬゝ火うを雪（ひう）光（ひう）

あうれゝゝもゝ
世の中乃ゝ
旨き事ゝゝ

うゝゝゝ
ゝとゝ
ゝ
ゝ人を
拾遺集 山里ハ雪乃
つゝくゝもゝ
む人を
のゝ

いとゝゝゝゝゝ火だゝ
するひゝゝ。わゝれゝもゝ
するゝゝ人乃
ゝぐゝ乃をとゝふきこゆればあや
とゝ出ゝ。ゝゝゝ。時ゝくゝやゝ乃わ（ゝ）ぬ（ゝ）
人ゆる人（徒）ゝ乃雪をゝ
ゝゝゝ。ゝんでゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ。ゝゝゝ人（昔）
ゝやゝ乃すゝをゝゝんゝ。ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ乃ゝゝゝゝ。ゝゝゝ出（会）
ゝれゝゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝ

あけぐれのそら
昧爽文選 [illegible]
雪月の山うつくしく
曉入梁王之苑雪滿群山 謝觀の自賦の句
朗詠うあり 梁孝王八漢文帝の弟 [illegible]
[illegible] 雪の名し [illegible]
[illegible] 生枝 [illegible] 文選
[illegible]
村上の帝時
雪月花の所
朗詠 琴詩酒伴皆拙
我雪月花時家憶君
これ文集 [illegible]

あれ[illegible]やれ[illegible]のさこゆるまでまち
ぬれどうち[illegible]
[illegible]
[illegible]

宣旨とり下人の優りやさしくうちもめでくうのうの皇太后宮の女房也 注所堂の中姫三条院の侍時皇后宮の女房也

愚案は拾遺集作者大和宣旨と同人あるべし 作者部類云中納言惟仲女三条院皇后宮女房大和也義忠卿妻也 大和

わくもいとおもしげなるとはくらとて。
みぢかくゆひさうぞくあるどうるうくし
てあれりもきくくそまつせうわくるふるも
あきくのあるさみとあきくわくるとこ
ろいうぐうせさせのいれ

侍鏡

春曙抄八終

宮うりそめて侍りの定まりの作方はまろ一始めの物語

よるくまりわて
ひるも侍りあるはよ
じくれとれおいあく
まりしあるべし神遊

△宮うりそめてまいりて侍りの定まりの作方はまろ一始めの物語

き事かどもとてずあるべしもおちぬべくれ
ばかりまいりくまいりくこの尺の作れ帳のう
ちにはあるりぬるまでとりいでて見
せさせるべしぶとえさし出すべうわ
ざとあるべしこれいとあるべしいりまとかどの
のあるべくあれば人のとりあるべしとと
ひるよりわハけせうはんくくまるべしけ
まどわんくくく

車をとりて
又さしぬきしばしばかりの
内わらわをとりてなりて出
里ずまいなどしばらく乃
居るとて
はづかしき事とて
はらをたづねまとをる
さまの事ども葛城の神
ハ形ハ人にて顔ハ
似をさびたるの子持を
みられて　おなじ
ようにの子まうて
屋に退出せ
ゆくて
ゆくてのうて
ゆくてのうて
ゆくてのう

ちんの法ひいけのうち
流法火桶。梨絵を
梨地乃こびいる也
上らふれまるひ出すひ
くるまにちらくしたる陪膳
上萬乃ぬりこしたる陪膳
あぐらふ候。中文の所
双錆あどする人れば
法おちらくしたる
やもくうるる
法のあるくさ法人を
の文づる別進退安
あまず屠りまもし
法ふとりつまさ本法文
ちつぎさ本ふおりや。
法ふハ中宮乃法封ふ
河海ふ三宮。各ふ五百戸。
長和ふ宮戸八戸。民
戸ふとせくくしたれ
を封戸ともいひ。愚按
今世の知行所のもの

門乃次ちくおこしてそれハ熊人を
ぬどど笑ハぢん乃法火ぬけ乃ち志ちる
うまもひくおつますよらふれまるひ
志多ひるまにちくしたるぱぎれ百
ちあのすひ門ちまるくぬる人こ
きぬまくれるわどもやするあるとる
三四人ぱどひくぬるまどくもありぢど
しあわてちきくふまふすれぱとの

長風炉裏

著衾

東乃前

まちくせまありくてちるまる抱もれ
やまとまあどするふれくふ川入くさすが
ゆの志きあめりし法儿帳のわくろひわ
まくの文ふ足いれくわ。大納言教乃ゆくせまる
乃法おをしたぬきの筆れくこ雪くり
くちくしくくくふぬるひくぬきぬ
映の宮
のくふ抱いけわくぬれど雪のいくくわ
てはれどおおつくるさにあどのの
あくとひくくふぱいくでくくぱいくお
あるうちわくひくおられくもや法
らんずるとてくとのの法あるさあいこ
れくわいはどおくくくんぱどわくいくう

寛ハ伊周乃ふ
まづ乃法乃の法世
くしあるとき
とりくきどくくる
さすぶゆくきあめと
ほが引入ぬくくふ
せくりきハ我ゆくう
法ぶふ殿の法わくあ
乃ゆくきあやくくは
儿帳のわのぶきくと
めづくきくの法
ふきくくあくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

われとはづかしとあるは
時代上は連續せざるべし
義つよくすべしわるくもあや。但
生おなじく海とも作ふ
われもはづかしとあるは
とは殺同じ真実の人と
人乃上の恥なりとは
ともとせり作ふ
きけばほのかのあしき
世つりは愛化の和天
人うどやうは足しとも
つくるる人も
紅葉の流れてふ作る女房
なをはづかしくも
いふりもとけいとをふ
いとでふいとをひきぬん
とほのかのとよる
ふらんすのてり
紅葉流れて紅葉盤石
女房乃作ひとり
ふるとすべきふる

ちつ。物となる多ひし
ろめわりひ真ーがわれとはづー
とあるるかる事など殺上人乃うく
あどす。すをきけど物とつんぢの和
天人あどのありきるこやと笑てて
をけつひあれ月ぜとぞれ乃ちまさるる
ふるもるざりこそそれくるるへ
あきこるる乃四生るめろんすーざこるは
も家乃四生るめろんすーざこるは
ふーーもめどーくーるてゆくりーのづる
笑てるめどーくーるてゆくりーのづる
面則とるるれおるれぬーーおるどーーまて。我をど
はりやとるるせるるいくるいふふは
とけいるるるあるるせるーざーるんるれるよ
紅葉流れて紅葉盤石
女房乃作ひとり
ふるとすべきふる

するるるるるりよーくるるていせるひぬ。
ふるるるる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

掩韻　孟律析云古集の
詩の韻字とゆるぎなく
ほの字と推もて勝負
をするこゝろはのなく
推ていることを明とを
わんごく者ゝ
まぎらはれどよく
こゝろこゝろこゝを
みてはけさハ
細流云倉るゝ愚案
獄の毋ゝ也ゝ他伝嵐
倉生フクッケビトとよわ
かぐわあるく　かぐ
ふまゝ　ぬちうが物語云云
かくわとるゝ　ぬ
わつふあるすんざ
従者也貝氏武ちわ
祖父ゝ　ゝ
ゝ
ゝ

ずまやうをばこうい
受領は大上國乃ちふ
あるしいこうちよの
あるしいまうゆきて
一位四ケ年の勤をへ
てはうまた他のうりて
合格の人をりふし
大弐　太宰府乃ちわいめ
也相當四位し太宰のつ
かさ帥し帥ハ大てと訳ま
但皮ゆて統ばまはを
あるとど府勝をへこうハ
ざれば大弐帥ゆりて
ゆて統ばまはをて
太宰府の勝をとこま
ばるゆ親模しする者し
四位　受領ハ大てと云伝られ
ばけ位ばまうて
内位なるゆ安嘉門位
なゆ寛弟内位なのぐ
ひこ官職便覧云寶
亀三年三月始置

（宰相　宰相よりのぐ）
（大弐　大弐や四位ぐ）
（受領　受領ハ大てと云伝られ）
（内位　内位なるゆ安嘉門位）
（大弐四位　大弐四位ちゆうくさまちゆうくさまちゆうくさま

夜とをしくふるわさぎ
為一夜もふる綿
紬し

河のうへ吹わたる
八月の風の涼やか
うしとはなれぬ

かりがねとなる都は
宋玉文選宋玉
風賦云其風中人狀
直慓悽淋溧

もとの葉 椋一名郎
椋和名ヒキ久

野ふの文の月 八月の
時く暴風也 ふく時
月乃字風と云 原
氏のわさ也 ものと
かくり

をとこ山すいぶ
立蔀 秀堀

野ふかみ吹ふれて
秋のひさる

ふるきこゑ木も
文選風賦云 蹷石
伐木 捎殺林莽

かしのつぶまま
格乃ひくを
悼とは哀也 こゑ
吹と 宋の注に云
風の風 形容 莊子
に天籟を論しる行

野ふの文の月 八月の時く暴風也 ふく時月乃字風と云 原氏のわさ也 ものとかくり

をとこ山すいぶ立蔀 秀堀

野ふかみ吹ふれて秋のひさる

ふるきこゑ木も文選風賦云 蹷石伐木 捎殺林莽

かしのつぶまま格乃ひくを悼とは哀也 こゑ吹と 宋の注に云 風の風 形容 莊子に天籟を論しる行

あらどころおつれ 十月ぶりふ木立
おちうる 乃 遠いとめでる
野のふ乃又の月 ふくいみでう 秋よ
たがのゆれ そでこそすいぶいあらの
ゆれ みあらよせんざいどもふぐる
げもおちさまるまぐもふれ 枝ぐ
吹ゆれ きさよ 女郎花
ちのうへ よりうびとひ せるいと
おくこと 女郎花 ものこころいてさきかをる
きんをことばよさくんやうう
こまぐと 吹入ること あらわつる
風乃 さるぐもねいとこ 未

うときくとうとき
くや
いとこきぬのうぐひす
こき紅のうめのはな
ねぐらあれハいまねれ
ざつれハうし

うちつくみる
髪のうけるこ屋
うぐひすきこゆ

物あつれるうきこる
こ女房れ所ふの髪
筆ゑの所ふつて髪
るを見ぬるうぐひす

髪のうぐひすこ
の生絹の単の表衣
ふのうぐひすこ女房
七八の女房の表衣

きぬのうハぐひすこ屋
物ゆうとこきぬのうぐひす
こき紅のうめのはな
ねぐらあれハいまねれ
ざつれハうし

うちつくみる
髪のうけるこ屋
うぐひすきこゆ

物あつれるうきこる
こ女房れ所ふの髪
筆ゑの所ふつて髪
るを見ぬるうぐひす

髪のうぐひすこ
の生絹の単の表衣
ふのうぐひすこ女房
七八の女房の表衣

すぜてあわるひさげの之れ
ゝもみてこそとぶれ（蓑よりさきの方のこと）うちくるきぬ
の乃あぎやゝあるよ。ちらぐらいあで髪
（芽よりきの方のこと）（さいうりぬ）（左右ちの方のこと）
乃おかゝ。あぐいまつで。ちすびいう
いとおかゝくおこくる火乃いわよ。ぬル
ぬ乃ひゝれいとつやふ又てゝとゝ乃
（帽額）（鈎し簾のつゝか）
ゝ乃あげくるぐれきそやゝあるとけ
（あきやゝゝ）（朝こうゝゝ）
さやゝよ又ゝ。よくてうぐくる火おけの
たいきゝげよおこくる火よゝうき
（格子）
ゝる絵乃又てくるおゝ。ゝ乃ゝときハ
やゝすぐかひくるもゝ。美ゝゝ文

うきゝゝ　奥列ゝ不
乃の是彩美今ゝ
ゝゝゝ乃おゝうきゝ
うきゝゝ乃ゝうきゝ美
のゝゝ世ゝゝゝ

やゝゝ乃　八代ゝ陸奥
（羽黒ゝゝ）（八代ゝ）普通ゝ八
（八十ゝ）　屋葉葉の
小町が髑髏と乃ゝ小野
の八十ゝ小野篁ゝ八十ゝ
乃ゝゝゝゝ乃ゝ八代ゝ
乃ゝの之ゝゝ乃ゝ
ゝゝれゝ乃ゝ八代ゝ肥後
（法輔ゝ）ゝハゝ撫ゝ
ゝゝ乃　八代ゝ葉ゝ
或ゝゝゝも葉ゝの野坂
の浦ゝ毋ゝゝゝゝ
ゆゝ波ゝゝゝゆめ
ゝゝの豊浦ゝ八代ゝ門

て人乃ゝるねめるのゝよゝのゝゝて殿上
人ゝゝ拍ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

奥列し

うらのうみ　吹上八代紀伊　きあげのうみ　なぎのうみ　うら
て乃浜　末新　とよのうみ　なぎのうみ　なぎのうみこうひ
ろ芋ひやーれ

浦ハ

奥列し

ゆふ乃うら　さいかのうら　出江　さいかのうら
あまつまつ　こまずのまつ　紀伊し　わかのうら

寺ハ

ほがさる　かさぎ　ちうまん　こう野ハ
こうぐう大師乃所ゆすみあるがあて
れあるゆえ　石山　こうし　さいか

奥列し

ゆふ乃うら　さいかのうら　虚空蔵菩薩
ゆふ乃うら　紀伊し　わかのうら

和泉の法華寺ハ　太和うわう本尊ハ弥勒解脱上人乃造
寺也　又華厳寺とハ　道昌一月宴座ゆゑ　虚空蔵菩薩
本尊ハ　ゆゑ　紀州乃ハ悔るし　伊勢邪道　袖をきりて圖して法悔るゆ安置せり
基上人建立と　扨祭礼
かさぎ　笠置寺　法滅乃ハ悔るし　伊勢邪道　袖をきりて圖して法悔るゆ安置せり
うるうん　永の袖の上より　昌する

あるとき元亨釋書ゆ　一説小栗栖野　法滅る常曉律師の太元堂
こう野ハ　金剛峯寺と号す。元亨釋書一曰弘仁七年　紀列　相勝　彼上高野山
創金剛峯寺
弘法大師　元亨釋書云　釋空海世姓佐伯氏讃列多度郡人父田公母阿刀氏夢
梵僧入懐而有身　謂唐青竜寺恵果授灌頂承和二年三月廿一日入定。
延喜廿一年十月　諡弘法大師
石山　紀寺　東大寺代仏ゆ　大仏ゆ　朗安上人
江列　洪多ゆ　菴ゆ　如意輪を安置　奥列ゆ　姫て黄金を　ゆ
斗　ハ　大六乃　観音　ゆ　安置せり　元亨尺　出ゆ　書
剛蔵王と　執金剛神　ゆ　安置せり　元亨尺　出ゆ　書
粉川　紀列　那賀郡　風呂村　粉河寺ハ　宝亀元年ゆ　建　猟師大伴孔子
古山ゆ　瑞光を見て　仏を安置せり　童子　一七日の
行ゆ　金色乃　観音を　あらはす　渋河郡代　伊勢　渋田村の家の
又者　子乃病を　観音ゆ　平癒せり　伊勢　渋田村の家の
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　元亨釋書ゆ　書
紫雲　紫雲寺と号す　近江　志賀郡ゆ　志賀ゆ
ゆ　代　ゆ　ゆ　ゆ　天智天皇の時　比叡の湯　出ゆ　ゆ
山　ゆ　優婆塞　ゆ　比叡　古仏乃　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

八ちりけり。今八二井ちれ本もの。ちら〜拾ゆ

法華経さ〜也

妙法蓮華経八秦の羅什三藏の翻譯。こを第子傳寿れ手受。この世ところ〜ひろまりぬ。

経ち

法華経ち乃ち也、よ経、ふぐん十承ぐん、そなぐ〜ふ、けてぐの大ず

ずいぐ経 隨求陀羅尼経一巻あり。不空三藏乃翻譯し。滅悪趣菩薩の一切乃流生の苦を拔濟せんるを世るぐり詰て。世るぐ〜ふをとき授けるぐり。この古言八三世の諸佛の尊敬万却をへ〜毗盧遮那如來の自法界身の手ゆて。尊敬却をもて求めるぐり。ぐ故よ隨求即得真言と名付ぐ。

ずんずぐ〜る

諸經家第一とすれば文

ふぐん経 千手千眼觀自在菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼経ちぐ世ぐ。

ふぐん十承 これ元叔経乃普賢行願品と。般若三藏譯ぐ。品乃中ゆ普賢行願品を。ぐり。西天竺沙門伽梵達摩譯ぐ。

ふぐん十承 不思議解脫境界普賢行願品と。ぐり。三者称讃如來。三者廣修供養。四者懺悔業障。五者隨喜功德。六者請轉法輪。七者請佛住世。八者隨佛學。九者恒順衆生。十者普皆廻向。この中ゆ十大承経と。ぐ。

佛在世ゆ善住太子。七日のうちぐ〜ふ死ぬて。地獄よりつぐ〜ぎ。ぐ〜ぐ。佛ぐ〜ぐ〜ぐ。ぐ〜ぐ。ぐ〜ぐ。

藏譯六臂身金色佳
説法相右第一思惟第
二持寶珠第三持念珠
左第一按光明山第二持
蓮花第三持輪

これ六第一思惟のよう慈念有情故とそうぞうを以て成ふ小ぐ〳〵そうを
空偏観与二臂中〳〵大ハ思惟ハ蓮花を持とあり。これもたゝ
同おなじ左持蓮花〳〵絹浄誘此法故〳〵

千手陀羅尼經曰。即發誓言。若我當來堪能利益安樂一切衆生
者令我即時身生千手千眼具足發是願已應時身上千手千眼悉具足〳〵
〳〵〳〵六観音 拾葉云六観音配六道 大悲観音 千手変破地獄道三障
大慈観音 正観音変破餓鬼道三障 師子無畏観音 馬頭変破畜生道三障
大光普照観音 十一面変破修羅道三障 天人丈夫観音 准胝変破人道三障
大梵深遠観音 如意輪変破天道三障 今案真言宗并法相宗除准胝観音
奉加不空羂索観音
不動尊 底哩三昧經上曰不動者是菩提心大寂定義也猶儀軌者
大日經二曰為一切障故住火上三昧

薬師佛 藥師瑠璃光如來 要文我此名号一經其耳 衆病悉除 心身安樂

これ〳〵行本願功德經〳〵十二願を説ものゆえ
釋迦牟尼。飜譯名義集一曰摭華云此云能仁寂默寂默故不往生死能
仁故不住涅槃悲智兼運立此嘉称。獨尊ものゝ一代教主〳〵〳〵
名義集云弥勒。淨名疏云此翻慈氏慈氏過去為王名曇摩流支慈育
國人自尒至今常名慈氏。姓阿逸多。此云無能勝云〳〵釈迦乃付
屬をうけ〳〵一生補処乃菩薩とす少一減劫のゝぐわ下生して成佛
ゝ〳〵三會の説法とゞめ故〳〵尚ほ等閑とゝ。尺ゝる入滅ゝわ〳〵ゝ出世
まぐハ五十七億低六十百〳〵出家をとゞ〳〵ゝ。小勒下生經〳〵ハ將来久至劫於
此國界成佛〳〵。河海

普賢 名義集云因是畧疏云約自體。體性周徧曰普隨縁成德曰賢。二約諸
位曲説無遺曰普。摩訶極聖曰賢。三約當位德無不周曰普。調柔善順曰賢。
三。〳〵ゝ法華經を説をゝ〳〵ゝ〳〵ゝ。普賢〳〵ゝ東方乃寶威德佛國
より佛おり〳〵ゝ〳〵ゝ法華經の法門を説〳〵。末代悪世の法華經乃
約者を守護〳〵悪魔和又等れ邪ゝを出れ出ゝ。末末ハ成佛せしめんと
て二十四乃陀羅尼をとゝ〳〵。行普賢菩薩勸發品〳〵。

地藏 大藏絹目指要録三曰地藏十偏經十卷。唐玄奘三藏譯地則堅厚無漂。
藏則包含無盡。八十佛輪轉十悪業故〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
文殊 名義集云文殊師利此云妙德。大經云不〳〵見佛性猶如妙德等。淨名疏
云若見佛性即具三德不縱不横故名妙德。西域記云曼殊室利唐言妙吉祥

位去物語二巻あり。天暦十年ばかり藤氏物語より
前にあり。二巻の位なり
うつのあい
うつのあいは
うつのあいは
はるうつ
はるうつ
はるうつ

まち　順和名云跳鞠以足逆蹈也　拂毬毛九拂者也　愚案跳鞠はなつの鞠　拂毬はまりはれ　又圓機法はう　蹴毬あり　拂毬　上下せもるあそび　こゆみ　伶人　源氏若菜の上巻に月のうちふらせくまりまつ

まあらんどもまりとなり　こゆみ　おんまつぎ　ごまひき

まひ

まひ　まひこ　さいへいらくいさまあれどいとおそし　太刀あどうそくあれどいとおそし　ちうこんあどきこに　多れまひ　だとう　ふかしらのしまれど　ぎくをとおそし　らうえん　二人ちくひざまてまひる　こまうど

本拍杵ら包れ一越調と

まひ　和名云挾琵琶撥名也　今案琵琶頸有四柱　又琵琶體有反首轉手　覆手承絃撥面落帶滿月等之名云　胡琴也　史記九十一樊噲傳に秦　和名道調曲乃中に云撥頭撥音波　楽　又魏武帝造　拂子　和名云箏形似瑟而短有十三絃云　神農造　又蒙恬所造　秦聲也

琵琶　ぱちのこと

琵琶　ちうのこと

琵琶乃風音調黄鐘　河海云凡琵琶八風音調及風音調秘曲あり　楊真操　流泉曲也仍此両調子為先　琵琶の黄鐘調　笛の平調　会　黄鐘調　及風音調八会笛　平調　盤涉調

琵琶　わうちきてう　わうちきてう　うかうけきう　さくふれん　さくべ　ちうとれさくつちといよちくべ

太平記に云ふ　河海云鳥楽　迦陵頻也一越調也　順和名に沙陀調の曲　迦陵頻　妙音天　南笠國　拾芥云　拔頭　食調　但和名に受伶　唐地よりもず本邦に伝　波羅門僧正これを学ぶ　拔頭　拔音波　楽　高麗　一越調の楽　納蘇利　六月乃競馬の月　雅楽寮これを奏　伶人

太平記に云ふ　項伯と云ふ者　項羽　項荘　項荘が落ちと太平の曲をまひ

語別ありて。二度ばかり河口伯あり。こぞ
うぐひすとのさえずりと　春愛囀　和名うぐひす
又ふるいとをりくさとあり　ばあるすうぐひす
さうふれん　想夫憐　相府蓮　唐平朝に海内愚衆太平廣記二百四十二繆誤部に云唐司空千頃以樂曲有想夫憐之名嫌其不雅將欲改之客有笑曰南朝相府曾有瑞蓮改爾為相府蓮自是后人語誤及不改國史補

笛ハ

ふえ　笛　説文云笛生也象物貫地生以竅為之其中空以受簧也　説文曰笛正月之音物生故謂之笛三孔象風之声

ひちりき　説文云篥策筋管也卷芦葉為頭截竹為管出胡地

あるべくもあらず
横笛の調のまぎれがわ
いろあさを吹ときもしれ
口伝
うるはしき髪ととのへ人
をなのりあげ
神代とうるはしき面貌
毛髪をくしけずりとす
也 塩汐は百貫に値す
琴のねもことちふむ
ぶくれいもいよ立
ぬうるさむさ
行幸 朝覲行幸野
行幸 諸社の行幸野
拾芥抄 儀式 器部 元亨
前陣 京職 神祇内蔵
弾正兵衛 民部 雅楽 治
部 式部 官史 集人 大
納言 左右近衛 中央
御輿 女官 侍中 後陣
典薬 内膳 造酒 下男
化神社行幸 化神社行幸

うるはしくよそをいとうつくしをいとうつくそ
しるあるなとうときくれどよあるいとう
ちうとうとうきのかせるかどころ
しでいそうるりきかけとうとうとん人と
みるとうちかわぬいきつうするやうく琴
笛ありかせてはゆしかるいとうなり

行幸

行幸 まうりのかへさ 陪從 殿上人 諸卿 侍臣 殿上人 諸卿 侍臣
殿上人 諸卿 侍臣 殿上人 諸卿 侍臣
あるり 雪とうちちりてかざしのむ
殿上人 諸卿 侍臣 殿上人 諸卿 侍臣
あをずわるとよわるるえとしいれど
なりしぶちりさやのきらやるろ

まうりのかへさ 殿上人 諸卿 侍臣 殿上人 諸卿 侍臣
習月きの花 使の宣旨
殿上人 諸卿 侍臣 殿上人 諸卿 侍臣
まも還立 儀式
江次第六云 還立儀
未知詳

九月もまうで 内侍 殿上人
詣 九月中日 二年 殿上人
殿上人 殿上人 殿上人
日あるべし 殿上人 殿上人
まで 殿上人 殿上人
内侍の 殿上人 殿上人
殿上人 殿上人 殿上人
殿上人 殿上人 殿上人
殿上人

業さきかもの社の姫小松
とりつきとぶらひきて
さくしやや長々集よ
冬ふかなの木ぬ
春のとしゆきぬ名所
みまよる姫なの社乃
姫小松万代ふるも久し
かくしぐ　ぜ　ぜ
但又同集ト云ふ姫
明の社のゆ祥ひひ
も見とりけぬ月ら
こりふあとうこてるや
陸こうふかこれ乃
天ま乃御輿ハ葱華
とて葱をかさしとも
みはるすけ　風輦
乃御綱をなれるる
大全人助をうつや。
百寮訓要云大全人祭
扇をのるとと解ら全人
そわぷ節ものはつを
ぬすしハ大全人の役

そしわおよいくるとあり
行幸に　あどそつる　ぬしはのんだこし
ぬさせやすそ　まつりたるを　えまつせてるハあけ
れ陸おそうらひつひはふまつるすを
おうぐくどぷ　神に　かうぐきふいけうぷはよハ
はとも　あきこはるさ　ひめまうちきみさ
へぐやんごとなめぐーうおゆぷみ
はるすけ中ら將ぐとなう
まつ乃人さいうぐおうーぷきのふを
ようぐ乃御のうるたうて　行幸麗乃ものし　一条乃おい
ちひろうきまつるるの日のうげと
おはくく車ふいわるもまぐゆけ
まハ扇ゆくかうーぬをりぐく

行幸ハ時陸綱をとを
なを行すをを
平林院ちくくおん
宮野のるをやおを

久ちまはるとんぐーうあせぐも
ひくしをふいとく伊て平林院
ちくくおんあどのをよをる車
ぐも葵ぐうとうちあくくえゆ月ハ
出れどえハ行ちくもわるふいり
できうんと見をさまーなきぬてまるて
郭公乃ものさくあるゆやこきこ
ゆるまでちきひぐせぐぷけうてと
こなーよ　ぷ　ぷ　ぷ　ぷ　ぷ　ぷ　ぷ
郭公ものはくくうちくくるこうぷ
ゆせんとおがくくうちくくるこうぷ
くくれどきくさーぷーぷーとまりぷ
ぷ社のうくうちあきぬぐきる

ことうりぬやと
車成はぐれりやと問
まむご 其期 問
[illegible]
[illegible]
[illegible]

江次第云 女房
女房路次第云長官
御輿 宮輿 下おほ廿人
輿長左右各五人 女嬬十人
執物十人 腰輿 上下異
[illegible]
[illegible]
[illegible]

るうつゝ　雪の日二歌の詞書人々垣下乃ろ歌　勅命のまゝ沼沢第三おろ。
乃ゝもさやゝの歌　武蔵野。
まや。長花おろ云大淀ぞふも。人数のあれ人々交
ぞふ。人数のあれ人々交
ぞふ。垣下の文章を
ゆめ。

かゝるうつの乃ぞ
きのふれあるひとう
種の乃ぞゝも人々乃
ゝるあ乃のあゝし
きゝ乃ゝすゝも。
こゝをきゝれどいえもと
よゝうゝゝる乃ゝきを
ゝきゝ車せきつぎ
て。きゝゝれゝどゝ
ぐゝゝゝしゝ所く
ゆきゝゝゆけゝゝ
らゝゝし　古今巻二
ゝれゝゝわゝゝ　風俗八
巻に別ゝ白雪の弦
てゝれゝきゝ天ゝゝ

我車をやゝゝゝゝ
つゝ垣れゝゝれゝ乃山里めきあゝれゝるゝ
小乃出ゝる枝ゝもあゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝひゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
て車乃こゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をきゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
が乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うゝはれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

汗のうすゝ〳〵どを

△芝原一段し

いうう あつき時夕涼みとゆかたの袖
さゝめうどれたがめつきうり男車乃ぢきさ
ゝ
をふいつぶき車ともあつぶ〳〵で乃人も
ちの乃すゞれあげくぶちわとひとり
ものるくさらせくいこうとと
ずげるれぶすく蝿ひきあ〳〵
笛乃ねきこゆるくいねるもロな
しぶぢやうあるかぐうう乃ちわづい
乃れあやちふりぎちねるれぶど
うちわぶてるがたうきこうあるど
れぶとくうやみあるぶぢきるとも
しるる松乃煙の乃車ふかれるいと

あやしうぬきちあるあ
れど
蘇乃香れぶど
あるくうれ 牡の匂
あやしきあの香う
車ちれぶど

ちれ乃みうあて
端午乃此香しを
ゆ乃香れ堀ぶや
うれしうれ
うのしうと

いれれもぶど
今焼しる香ちれ
成本るひあくう
六月廿日ばわよ
ぶ黒きふぶの毒の
ぶど昭ゆ〳〵ぶの氣
ちとあぶとぶと
ちきゆぶるるる

こうぶつ　ぐんりょのあせばむ　ひやもぐ　ぐつふ
ぶあわず　わぐ　ぐつる　扇と

月乃ことあるきこそ　あゆむ　にすい　きやうあぐ　のわれる
あるもこそ　ひすれ　をそやふ　ふてえさ　みしれが　車れ　ものえい　をはや　ぐうふ　しくぷ
やうにみ　乃ちと　しるこう　ぐーれ

たわきあ　くよのき　稲

法師　ぐ　ぐ稲　家　ぐ　ろ　ぐ　と乃　墨

おのれ　月お　ちわ　ぐきい　女わ　きこ　ちぐ

ぐるも　ちわ　乃やう　あんい　ぬろ　ぐ　火　摘

わづづき　松乃　木　山ぶき　乃花　ひぐ

るとう　ーも　よぐきい　ぬろ　きこう　あれ

ぐ　ぐ　ぐ　てあと　ぬべき　稲

と乃　稲ぬよ　糸　どうぐ　いけと　女の

人乃ひすめのこと
舌つきあてあいぐれ
るをきぐるべー

乃や　厨和名
字彙云廚　烹飪之所
ものを烹調するところ
基云　曹司
ぬひ乃ぬぐし　曹司
公廨と同　今の世の部屋
ぐ　ぐん　懸盤　貴人
乃膳　月ゆ　原氏物
菜　院乃れ　浅
乃ぐ　ぐと　乃り
童女　ぐ　ぐ　稲
きやうる　童女　よき
ぐ　ぐと　乃り
中のぐん　中盤　懸盤の
ぐる　ぐと　河海云　延長御記　日宋女　調和　若菜　供進　給侍　臣　盛中　坏　置中　盤略
ひぢ　乃　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ

髮　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　てあ　ぬべー

人乃むすめのこと

人乃ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　稲

乃や　ぬひ乃ぬぐし　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　

けいし　おもしろう
華貴　はなやかなる

はしたない人こそ
をかしけれ　乃すがたを
はしたなう言人をばいふ
つねにくちなれたる
上達部君たちなどの
行幸に八位六位の殿上人

物へいくにさきをげるものこそ
えだのうへやのあるうちくるまのうしろ
いづちなんとおぼゆれ　みきをげるわ
らわべなどのおこめいとなげやりなども
えもいはぬ　げいしのはやうあるがそに
つちかりくはやるとときてきろきさうま
はきをるほそ八をこのみるよ草紙ぶ
などいれくことそゆくこそ　ゆくびよ
てはやうかれ門ぢうある所をわるを
よびいるに　おいぎやうあくいつくもせで
いくるのそ　ぱみうん人こそをいくれ
行幸はめでたきほ上達部君たち車

ゆくに供なれば
よりのもとにわも
そもとの行幸の上達部
の車はなきがらく
たきとひしに付て
車はえ出でしげるか
わるきすがもをそ
況経などいとうら
況経猛々の車などハ
罷うりたる世のうあ
れば　さまで風流
よ　ゑ麗なるもいと
えぐあるはしと
てみまわうてもむ。
あるえる車えでくハ
えずしてなれるとも
くるを見のれくるこそ
まえんとめまとも
そもとわ　あの物えの車ハ
えやうのよるこそ
いつくしく人こそ
なるさまそハけ物

家さはいしさう
ほうぐ　きき

あるのあるぐすう
よりの乃すもわびげる車よ
車乃装束
けうこそわくて物えるる人こそとも
況経　などハいとよ　ぱみうあるの
るもあれば　それぶ物あるぐちるさ
くえぐるくべきをよてみ
などそえんであるぬべ　ぱすれと
なくてきろきひくうられなどで
なのわうぐこそ見まうみく
車をトすれをきていとち
ものうあしと出ぐるぶやきる
車なしえんげくハはきるなどえる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さふゆ人よ。人形と名付て也

ゑのけさのけさせて
庶民輦車使車おろ
ひろ下るもざふくの人
あき情をさひさざめ
けるさまのけさまと
いるまゐり仰さわ
うけく
いまくでハあぐんをかう
て出ぢまくまくまく
まぐし

まんとゐるわどうり陸おとも只おり
うおりくぞうてる車どもとくのけ
まのけさせくくく

[illegible]

紙よりあれば名乃わりなくうるる
あるまじきぬ名乃わりなくうるる
さてやねぎごとわりはんとけいー
しれば右近内侍ぞよわるせるひくわ
らせるあひなり

○三条乃天よ　動物云長保元年八月九月自
うぶれこ　職御曹司移御皆高
三条宅
三条乃天よ　動物云長保二年二月
おもいるせちどけさ人ごケケげどの
あどうとあるくゝ姫こやわらえ侍女
まらぬらすしお三位
させたまつとゝいとおりうきさ菓むらるわを
せるるるおをさーとりふるのを

人乃ゝそてきるとまきうすやうと鶯
あるすぐるれわてきくこれせし
万葉十八せうる歌おのれくこれとむ
うけつくいとてまつせられは
皆人ハ花やてふやといそぐ日も
わがこゝろをハえぐきわる
こ紙乃ゝそ刺てうしやのつ
んうすきゝ
△十月十餘日乃月いとあきてはりきて
ゝんさて女房十五六人ばかり皆こきて
うきさて門くゝてゝ中に中紙乃の
ゝ乃あの張るをきてびわ琴をかう
ゝしらばあるしきとハいとくもて
ゝ中ゝ

[illegible]

人ハ花やてふやといそぐ日も
わがこゝろをハえぐきわる
こ紙乃ゝそ刺てうしやのつ
ゝんさて女房十五六人ばかり皆こきて
ゝ乃あの張るをきてびわ琴をかう
ゝしらばあるしきとハいとくもて
ゝ中ゝ

法也。赤衣をきて[illegible]
成信の中將　勅使の原成信
[illegible]
大原雅信女長徳四年
左中將　元民卿大納言

大菊丸　勅使の正光　長保二
年藏人頭左中將四年
十月大菊丸　惡業糸滅
正光　関白兼通五六男母
左馬頭有年女

[illegible]
[illegible]殿師とい[illegible]
惠耳聰[illegible]林下[illegible]動謂
之牛鬼と蒙求[illegible]
[illegible]湯問篇[illegible]焦螟[illegible]
[illegible]虫群飛て集於蚊
睫を[illegible]
人[illegible]を[illegible]
[illegible]を[illegible]黄帝と容

[illegible]
成信乃中將[illegible]人乃[illegible]
[illegible]
[illegible]

とあれとかれと
[illegible]
[illegible]
[illegible]

赤染

春曙抄九終